中學新國文 卷六

375.9
Sa19
資料室

41722
教科書文庫
4
810
41-1932
200030
1609

文部省檢定濟
昭和七年八月二十四日中學國語漢文科

文學博士 笹川種郎 編

中學新國文 卷六

株式會社 帝國書院 發行

資料堂
375.9
Sa19

廣島大學圖書之印

広島大学 教 38379 図書

巻六目次

一 大御心 北原白秋 一
二 高原の秋 吉江孤雁 八
三 秋の讃美 上司小剣 二
四 支那人と花卉 永井荷風 一六
五 洞庭湖 佐々木信綱 一八
六 水の美 大町桂月 二三
七 栴檀 二〇
八 藝苑佳話 二三
一 鳥羽僧正 (古今著聞集) 二三
二 繪佛師良秀 (十訓抄) 二五
三 和歌のほまれ (十訓抄) 二六

九　日蓮上人　高山樗牛　四一
一〇　霧の身延　田山花袋　四五
一一　雲と落日　尾崎喜八　五二
一二　夢の國　谷崎潤一郎　五四
一三　吉田松陰　德富蘇峰　六三
一四　妹にさとす　吉田松陰　七一
一五　壺と提灯　柴田鳩翁　八一
一六　さる歌よみ　八七
一七　義士最後の神盟　福本日南　九二
一八　打入の光景　榎本其角　九七
一九　三人の訪問者　島崎藤村　一〇〇
二〇　吉野の行宮　北畠親房　一〇九
二一　最後の參内　（太平記）　一一三

二二　乃木大將の殉死　德富蘇峰　一二八
二三　早春の賦　阿部次郎　一三七
二四　樹の根　和辻哲郎　一三〇
二五　扇の的　（平家物語）　一三八
二六　高き希望　山路愛山　一四三
二七　三奇士　一四七
一　君平と蘆庵　瀧澤馬琴　一四七
二　獄中より　林子平　一五〇
三　節季の山趣　菅茶山　一五一
二八　國史にかへれ　德富蘇峰　一五五
二九　力　幸田露伴　一五九
三〇　熊野落　（太平記）　一六五

岳陽樓

（田崎草雲筆）

（第五課參照）

目次

目次終

南京大學圖書之印

中學新國文　卷六

北原白秋

一　大御心

明治天皇は現神としての大自覺に立たせられた。此の神ながらの道に立ち、まことに聖帝として萬民の景仰を受けさせられた。その御製を拜すれば、王者の御風格が、大御心を通して、蒼穹のごとく、日輪のごとく、一天四海に輝きわたらせられる。歌柄といふ點から見れば、あらゆる古今の名歌人も、大帝の御前には鞠躬如たらねばならぬ。帝王と凡下とはおのづからにして違ふ。これは天意であつて、如何ともいたしやうがない。

あさみどり澄みわたりたる大空の

廣きをおのが心ともがな

御製はおのづからなる歌調で、御歌所の歌調をはるかに超越しておはせられる。ある歌人が、萬葉調でおはせられぬといふ點について遺憾の意を表してゐたが、萬葉調ならぬ點こそ御製の御製たるところではないか。要するに大帝の御製は、實に大帝の御風格そのものであつて、桂園調とか萬葉調とかを以て評し奉るべきで無い。形式以上の大稜威が、そのまゝの帝王調として流露し光被してゐる。私どものひたすらに欽仰し奉る所以は、實に茲に存するのである。

眞の王道こそは、大帝の踐ませたまふ絶對無二の天の道であつた。現神としての御自覺そのものが、既に一の宗教でおはせられた。御製を一々拜誦するに、その殆どすべてが、皇祖皇宗を崇め、國を思ひ、民を惠み、四海の和平を求め給ふ御聲ならぬはない。これ

我が國民の深く感佩し奉るべきところである。

大帝は、人たるの道、子たるの道、言の葉の道を、あくまでも實に卽いて御詠み遊ばされた。その中には、教訓中の教訓、道歌中の道歌として、純藝術以外の見地から拜せられる御製も少なくないが、純藝術と拜し奉るべき御作品も亦頗る多い。世の教育家・宗教家・道學家たちは、御製の純眞なる御風格を冒瀆し奉つて、その各自の道の爲に牽强附會してはならぬ。何となれば、大帝の御製は理趣のための理趣でなく、一に王者としてのさながらの御詠歎であらせられるからである。

人口に膾炙してゐる御製以外の御製によつて、大帝の御一面をうかゞひ奉つても、私はほと〳〵歌人としての大帝を思慕し奉るの情に堪へない。

誰人もまだそこに言及したものが無ささうに思はれる。よつ

て、余はあへて茲に其の種の御製を謹鈔して、歌壇の人々の拜誦を希はうと思ふのである。

明治天皇宸筆

庭菊

この秋もところどころにきくの花
うゑてたのしむ九重のには

をりにふれて

庭のおもは若葉しげりてすゞかけの
花さく頃となりにけるかな

朝顔

しばがきにまとひあまりて荻の葉の
するにもさけり朝顔のはな

秋風寒

宮のうちも吹く風さむくなりにけり
山べはいまや時雨ふるらん

をりにふれて

小山田のをしねかるべくなりぬらん
庭の薄もほにいでにけり

をりにふれて

冬がれの芝生の菫さきにけり
小春の日影さしわたりつゝ

雨中萩

するまではまだ咲きみたぬ秋はぎの

花うちみだり村雨ぞふる

禁庭萩

昔わが折りてあそびしはぎの戸の
花もこのごろさかりなるらん

秋月明

ともしびをかゝげぬ方に來てみれば
いよ〳〵あかし秋の夜の月

里

うつせみの代々木の里はしづかにて
都のほかのこゝちこそすれ

菫

をさなごにつませまほしと思ふかな
すみれ花さく庭をめぐりて

峯雪

こがらしのふきはらしたる空遠く
甲斐のたかねの雪ぞ見えける

子

思ふことおもふがまゝに言ひいづる
をさな心やまことなるらん

蝸牛

世のさまはいかゞあらんとかたつぶり
をり〳〵家をいでて見るらん

見花

高殿の窓てふまどをあけさせて
よもの櫻のさかりをぞ見る

何等の滯もあらせられぬ。その思無邪は天の思無邪である。

良寛の歌はよいと云ふ。しかし良寛以上に、大帝の御製は眞率で無心であらせられる。良寛は天成の童心者であつたであらう。しかし、かの思無邪の境涯は、禪家としての修道と忍苦とから更に深められて、始めて幼子の心に還つたものにちがひない。大帝は抑からそのまゝであらせられる。禪家の悟入やそれに附纏ふいやみが、些かもあらせられぬ。この純眞無垢こそは天意である。良寛の歌を渇仰する歌壇は、かくの如き大帝の御製のある事に心を留めねばならぬ。

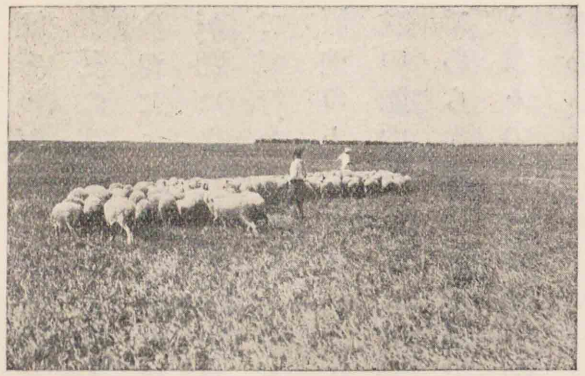
太古にして太新、蕩々乎として天の如しとは、まことに聖帝明治天皇の大御心であらせられる。（季節の窓）

二　高原の秋

吉江孤雁

燕麥は黄枯れ、枯草塚はロシヤの平野を思はせるやうな句を立

牧場の羊群



てて、夕日のなかに、無數に立並んでゐた。緬羊の群は、白楊の並木の蔭に、枯草塚の周圍に、或は草原の上に、輪型になり、縱列をつくり、幾群も幾群も草を嚙んでゐた。

牧場の緩傾斜は夕日をうけて、冷たい光を反射し、白楊の並樹は夕暮近くなるにつれて、一層あわただしい心さわぎを、葉裏のひるがへる姿に見せて、ひら〳〵ひら〳〵と跳つてゐた。

月寒（ツキサップ）の種羊場は、日本に稀なる大陸的な高原地である。秋早きこの高原には、日の光に、草のきらめきに、一望の牧場のおもてに、更に遠い山々の影に、その山々の麓をめぐらす野幌（ノッポロ）の原始林の姿に、近くは、無數の

緬羊の群の脊に、一様に沁みいるやうな悲愁を漂はせてゐた。

夏の華やかさを悦ぶのは、いかにその苦熱を人々がかこちつゝあつたにもせよ、我々に共通な原始性であらう。その華やかな夏が、既に去りゆく姿を見せて、高原の上にたゆたひがちに、我々を捨てて行かうとしてゐるのである。この初秋の淡き悲哀が、特に高原地の上にたゞようて我々に感ぜられるのは、とりもなほさず、我我の胸中深く棲まはしめてゐる、原始人の嘗てしみ〴〵味はつたであらう痛切な悲哀である。水草を追うてさまよつたでもあらう我々の遠い祖先等の、去り行く夏を悲しむなげきのよみがへりである。

野幌の原始林を前に、月寒の牧場の上に立つてゐる我々には、何處よりも特にこの原始人の味はつたでもあらう初秋の悲哀が、胸に迫つて來るのをおぼえずにはゐられなかつた。

この牧獸の群のなかに、一頭の病羊がゐた。いかなる群羊よりも、特にその病獸は人にすりよつて、我々を離れようともしなかつた。「額の上を二本の指でおさへるやうに左右に撫でてやれば、それが何よりもよろこばしいのだ」と、年若い技師が教へてくれたまに、さうしてやれば、その病獸は、身をすりつけて離れさうにもしないで、何處までもついて來るのであつた。

病獸のかなしさは、同種の生物に看護を求めることは出來ない。他のものは病者を捨てて、まつたく顧みようともしない。病獸は死ぬるときでも全く孤獨で、その死屍までも他のものの目につかぬやうに、生前に用意をして、深い藪蔭に身をかくしてしまふ習性を持つてゐるのである。これは、全然馴致された家畜においてもさうである。我々は、飼犬や飼猫が病氣をした時は、一層人にまつはりつくのを經驗するけれども、その死屍を見かけることは殆ど

ないのである。

この病獸の上に、いづれのものよりもはやく、秋の近よりが切實に感ぜられてゐたのであらうと、つく〴〵あはれに思はれた。

（「朝日グラフ」所載の文に據る）

三　秋の讃美

上司小劍

秋は、昔から物の凋落を意味するやうに思はれて來たけれども、凋落の裡に、復興の氣の溢れてゐるのを見逃すことは出來ない。

澄みきつた大氣……それはひとり秋の有する寶ではないか。山も野も皆一つ〳〵磨きあげられたごとく、鮮かな光を放つ。遠くにあつた山は近くに引寄せられたやうに、近くの野はいよ〳〵近く、呼べば應へるばかりである。

秋晴の日に、赤蜻蛉の飛交ふのを見るのは風情のあるものである。秋の太陽は、春の太陽よりも人間に優しい。人間が日月に親しみ、星辰に親しみ、天體と融和するのも秋の特色である。宵の明星の美しく柔かい光が、先づ夕涼みの客に親しまれる。團扇片手に顏を掩うて、「お星樣、ばあ。ゐない、ゐない、ばあ」を、宵の明星に向つてしてゐる幼兒の姿も愛らしい。

天體の鮮に仰がれる秋の夜の美しさ。星の名も二つや三つは覺えてゐて、恆星と、惑星とを區別するぐらゐのことは、誰にでも出來る。北斗七星を數へて、次には天の川を見る。

荒海や佐渡に横たふ天の川

の芭蕉の名句も、もとより初秋の情緒である。

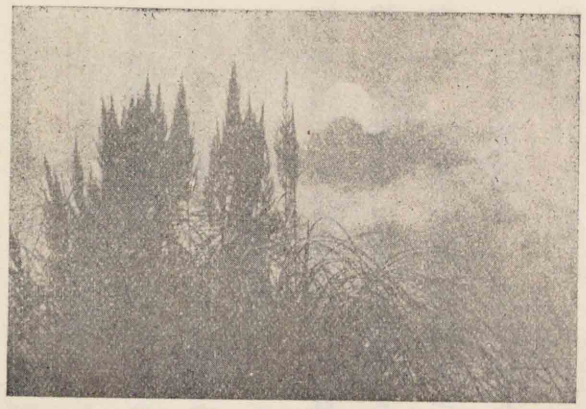
古來の詩人といふ詩人は、何れも天體に親しみを持つてゐる。遠い〳〵月や星をば、地上の動物や植物のやうに、自分の友達として見てゐる。牽牛・織女の話なぞは、いかにも人間と天體とのゆか

鳴立つ澤
心なき身にも
あはれは知られけり鳴立つ
澤の秋　夕暮
（新古今集）

芭蕉野分して
芭蕉野分して
たらひに雨を
聽く夜かな

秋郊の月

しい融合を語るものではないか。これも秋の情趣の一つであらう。寂しみを主とする日本の詩人は、殊に秋の天地に於て活躍してゐる。「鳴立つ澤の秋の夕暮」の西行法師や「芭蕉野分して盥に雨を聽く」芭蕉など、皆秋の詩人と稱することが出來る。枯木・寒鴉の寂しみに浸つた芭蕉は、秋といふよりも寧ろ初冬の情趣に生きた詩人といはなければならないが、彼の讃美した時雨・枯野なぞは、俳諧の季において冬に屬するけれども、情緒のうへからは、どうしても秋のものである。澄みきつた、さうして寂しみのある秋といふ時季があるので、よくも生きて來た、とでもいひさうな詩人が、日本には



明月を抱いて
挾飛仙以遨遊
抱明月而長終
（前赤壁賦）

池をめぐりて
名月や池をめぐりて夜もすがら

非常に多い。

天體の一つとして、最も我々の世界に近い月は、昔から多くの詩人によつて讃美され、分けても東洋の詩人によつて、感傷的な言葉を投げられてゐる。さうして、それはすべて秋においてである。月といへば、もう秋のものといふ氣がするではないか。「明月を抱いて……」の名句を、赤壁の賦に殘した蘇東坡の、秋を讃美した心と、我が芭蕉翁が深川の庵室に明月を仰ぎながら、たゞ一人「池をめぐりて夜もすがら」の寂しみを歌つた心とは、同じやうな詩趣である。

星辰のあざやかに仰がれる秋の夜には、巷の天文學者がなかなか多く現れる。我々が天體に對して絶えず考へてゐることは、あの自由な組織である。毫も個々の自由が束縛されずに、殆ど絶對自由の中に、一定の軌道を循つてゐる星の姿が羨しい。あれに比べると、地球上の人間の生活の不自由さ、だらしなさ……。そんな

ことを考へるのも、また秋の夜の感傷の一つで、澄みきつた空なればこそ、天體に對して讃美の聲を發するのである。天體の讃美は即ち秋の讃美である。

荷風

名は壯吉
現代の文學者

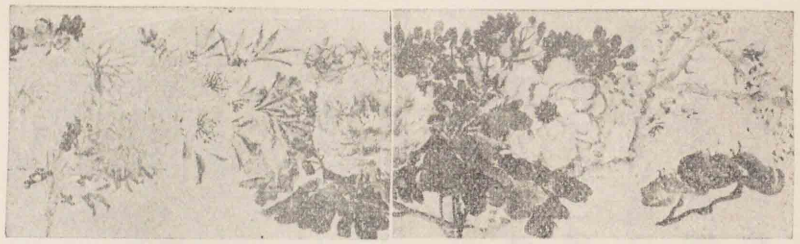
四

支那人と花卉

永井荷風

今日は雨ふりて物の濕けると甚しきに依り筆の軸煙草入の筒なども悉地あしくべたつき先づ依て夏の花なる芙蓉花白粉花百合なども既にあらかた萎れ果てあるのみ僅かに秋草を加へ萩も漸く咲きこぼれ中にては一番秋海棠を好みもし少は秋の色の中にて一番秋海棠を好みもし依て夏の憂きを忘るゝよりだに花卉は

花卉
（趙之謙筆）



思ふに支那人の花卉を愛するは道を説くの世界の文學中支那に就きまして最も林園月夜などに隷属を見出だすに過ぎざるを講ずるが如き思ひ入れあり依て支那と中古とを比べ見るに世人好古堂を設し跋扈し清廉の士を迫害し其の人の一生をくしやみあるのは皆田園の美を不遇の一生をくしやみがたき憂愁のは特に殘更に宵月の一面を衝ふよりほかなしかなき次第に依さればこの少き隙者が花を論ずる語の處には如何なる若き強弱の名殘と滿き思ひ出のこりたるは當然のことなり依て

佐々木氏
號は竹柏園
歌人
文學博士

佐々木信綱

五　洞庭湖

漢口を出て四日目の午後岳州府についた。岸の上を見ると、岳州府城がこだかい丘の上にあつて、幾千の人家を包んだ嚴かな城壁が、高い崖の上をめぐつてゐる。岳陽樓は城壁の東の隅に立つてゐる三層樓である。城壁の甎瓦は幾百年の風霜に黑ずんでゐるのに、建てなほしてまだ久しからぬ岳陽樓は、金碧燦爛として燿

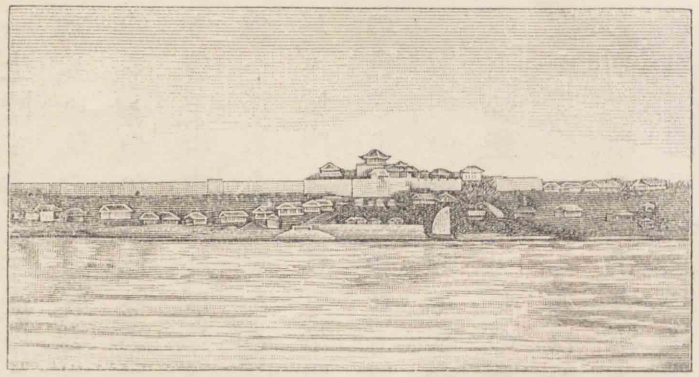
范文正公
宋の宰相范仲淹の謚
岳陽樓記の
筆者

いてゐるので、色彩の配合が極めて美しい。

上陸すると、岸邊のこゝかしこに小家がみえる。「蘆のまろ屋」ともいひさうな、蘆で蒲鉾形に葺いたもので、家とはいはれぬほどのさゝやかな住みかである。それらの小家は減水期の間だけのもので、增水すれば岸まで水が滿ちるので、その時はとりくづして他へ移るさうである。その小家の間を通りぬけて高い石段をあがり、城門をぬけて岳陽樓を訪うた。金碧の瓦に、赤塗の柱や壁、その色どりがいかにも鮮かである。

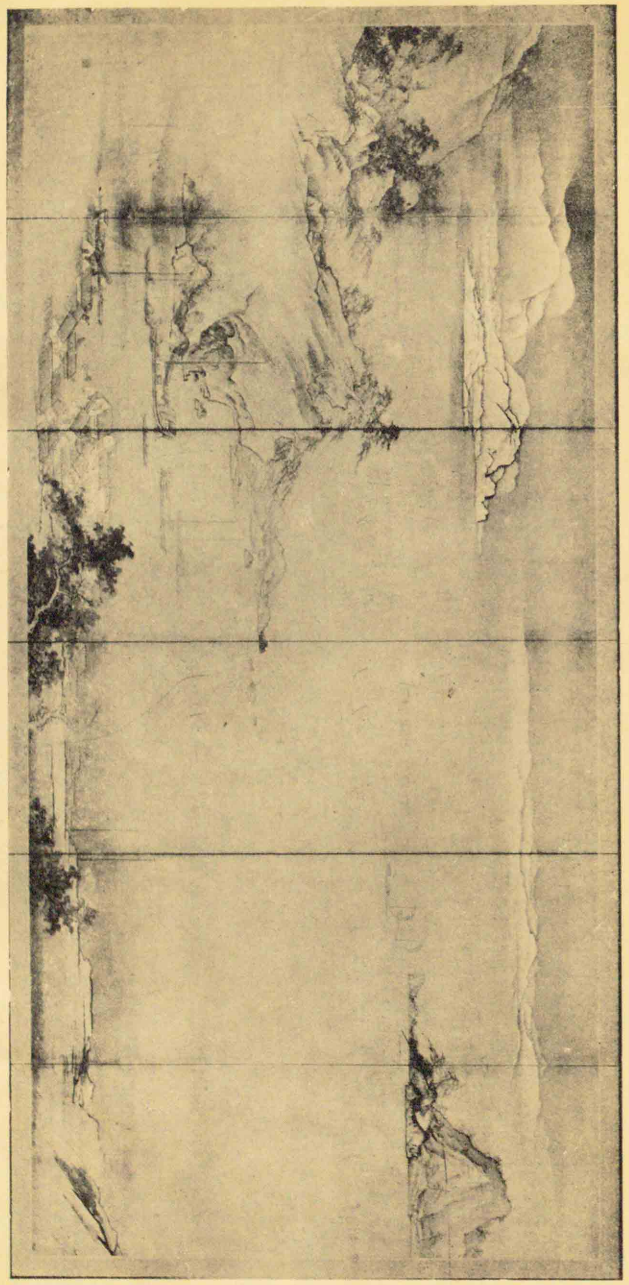
案内の僧に導かれ、壁に題した詩や聯の句などを讀んで、三層樓の上に登つた。かの范文正公がこゝの記を書いて後、この樓は幾度か重修した。人はかはり世は遷つても、昔ながらの自然の麗はしさ。唯見る浩々湯々、洞庭湖は目の前に天地の大幅をひろげてゐる。湖の門戸には、彼の堯の女湘君が居たといふ君山が右に扁

洞庭湖と岳陽樓



山が左にある。どちらも江の島位の島で、さながら洞庭宮を守る獅子・狛犬のやうに並んでゐる。夕日は、今しもそのたゞ中に落ちようとしてゐる。天地の大觀に、しばらく我を忘れて見いつてゐたが、やがて船に歸つた。

幸に風は追手。帆を張つて愈〻洞庭湖を横ぎらうとする。夕日は二つの島の間に落ちて、見る〳〵紅の眞玉が湖心に沈む。かへりみれば、いましも岳州府城の上に月が昇る。日を數ふれば、恰も舊曆十月十五日の夜である。かの瀟湘八景の一なる洞庭秋月ではないが、望月の夜洞庭を過ぎるとは、何といふ好因緣で

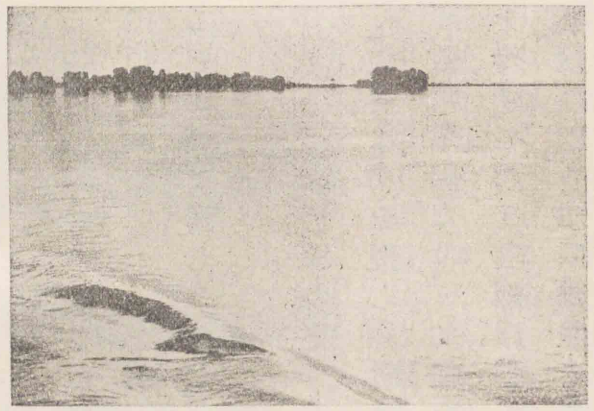


（雪崖　芳野　狩）

瀟湘八景
平沙落雁
遠浦歸帆
山市晴嵐
江天暮雪
洞庭秋月
瀟湘夜雨
遠寺晚鐘
漁村夕照

洞庭湖

皓月千里
岳陽樓記の句



あらう。

夕日は遂に湖心に沈んだ。その餘光が空に耀くや、空の色は忽ち紅に變じ、その紅の色は湖上に映じて、畫にも寫し難く麗しい中を、遙に一帆、また一帆、風のまに〳〵遠く近く、かつ顯れかつ消える。何ともいへぬ風景、むしろかういふ風景の中に包まれながら、湖の底深く沈んだならばなどと思はれる。

美しかつた夕映も光を失つて、湖の上は薄暗くなる。月はいよ〳〵澄みのぼる。見えるものはたゞ黃金・白銀の波。眞に、皓月千里、浮光躍金(ラシテ)、靜影沈璧(ムナ)といふありさまである。

月は良く、風は追手。船は帆腹飽滿、一瞬千里の勢で進む。夜はふける、月はます〳〵澄む。此の意人の識るなし。言ひ知らぬ樂しさ、寂しさ、何ともいひ難き感が胸に充ちて、我が身そゞろに我あるを知らず、この隈なき月と果なき湖とに對して居た。

一昨年の初秋、富士に登つて、絶頂に見た七月十七夜の月。彼は山頂、これは湖上。しかし、あはれは同じあはれで、風月の緣に富むことを天に謝したことであつた。（帝國文學）

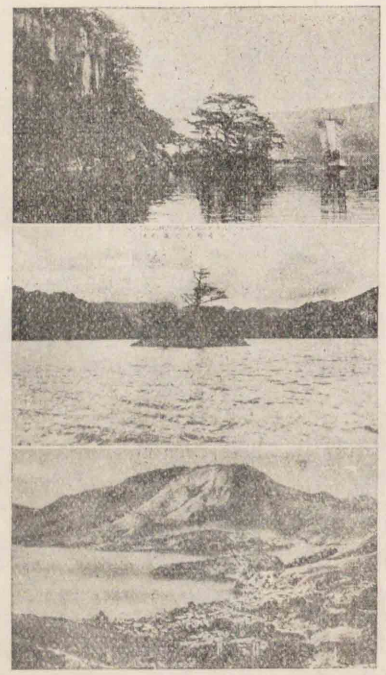
大町桂月

六　水の美

「仁者は山を愛し、知者は水を愛す」とかや。山は靜かなり、活動せず、故に單調なり。如何なる名山も、長くこれに對すれば厭かざるを得ず。たゞ雲烟浮動するによりて、山も活動するが如きを覺ゆ。雲烟は卽ち水の變體なり。山に登るに、水のなきものは平凡なり。

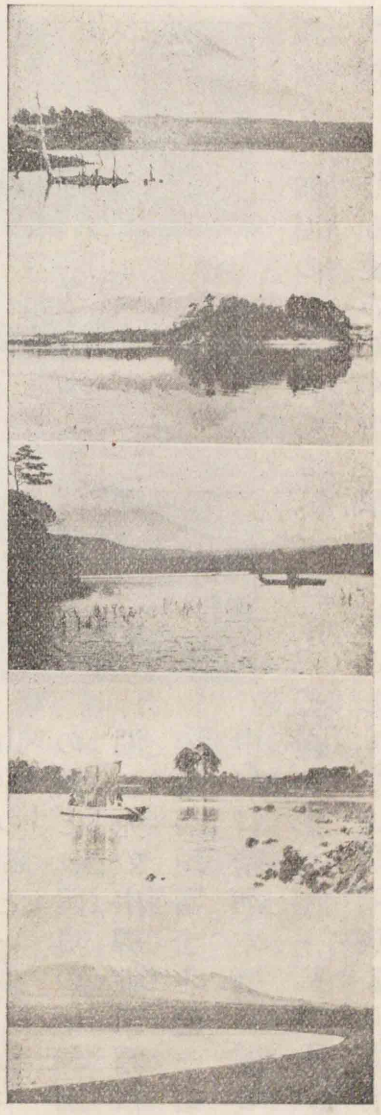
仁者云々　論語雍也篇の語

富士山の如く、淺間山の如し。山、水を得てはじめて奇なり。日光山の如く、立山の如し。水はその活動して止まざるところに美の價値を有す。されどまたその靜かなるところにも、一種の趣味を有す。山中に於ける瀑と湖とは、この二種の美をあらはせるものなり。



十和田湖　中禪寺湖　蘆の湖

單に湖といはずして山中の湖といふ。山中の湖とは、陸奥の十和田湖、日光の中禪寺湖、箱根の蘆の湖、富士北麓の山中・川口・精進・本栖諸湖の類なり。四面の山、浮世をさへぎりて、高低參差、影を湖上におとし、澄波一碧、恰も鏡の如く、山の翠滴らんとして、水は碧瑠璃よりも清



本栖湖
精進湖
西湖
川口湖
山中湖

し。幽の極なり、靜の極なり。湖畔に踞して水に臨めば、感興何となく胸に湧く。夜色蒼茫の裡、湖心月を印するにいたりては、更に一層の幽趣を添ふ。天地われに合するかと思はれ、われ天地に合するかとも思はる。羽化登仙するが如しなど言はんも、なかなかにおろかなり。

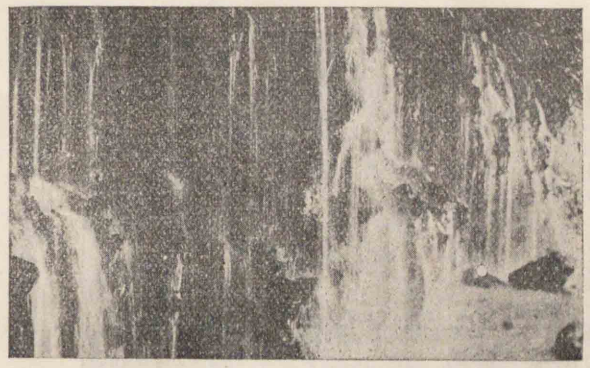
これに反して、活動の美をつくせるものを瀑とす。一落千丈又

日光三瀑
華嚴瀑
霧降瀑
裏見瀑
（歌川廣重筆）

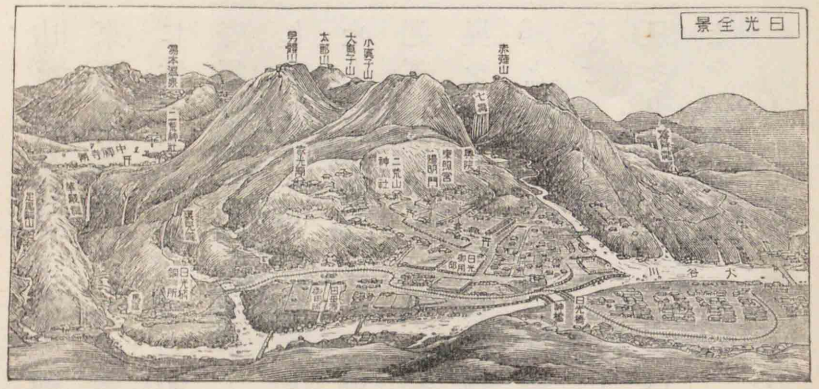
萬丈、滾々瀉下するさまは、終日相對して飽かず。夏觀るに最もよし。一度瀑に對すれば、人間夏あるを知らず。朝日に映じて虹霓を現ずるも奇なり。崖畔の樹木霜を帶びて紅葉すれば、觀更に奇なり。瀑に懸崖を直下するものあり、日光の華嚴瀑の如し。谿を傳はるものあり、日光の湯瀑の如し。二三段以上に折れたるものあり、立山の稱名瀑の如し。いづれもみな觀るべし。

日光は瀑が名物なりと稱せらる。されど天下の奇觀といふべきは、ひとり華嚴瀑のみ。湯瀑やゝ見るべし。霧降、裏見以下の瀑は、わざ〳〵行きて見

白絲瀑



るべき程の價値あるものに非ず。日光に限らず、すべて日本の諸瀑は、高さにおいては見るべき物少なからざれども、幅において見るべき物はこれ無きやうなり。たゞ富士の白絲瀑は幅百八間と稱す。半分はかけねなりとすとも、なほ五十間の幅あり。水、全壁をおほへるはその一部にて、數十百條相連なりて水晶簾をかけたるやうなるも、亦天下の一奇觀たるを失はず。世に瀑といふ瀑は多けれども、華嚴と白絲とを見れば、先づ以て瀑を語るに足るべし。華嚴は幅數間なれども、五十餘間の長さあり。白絲は高さ六丈に過ぎざれども、幅は一町位あり。華嚴の瀑壺に下りてこれを仰げば、恰も銀河九天より落つる



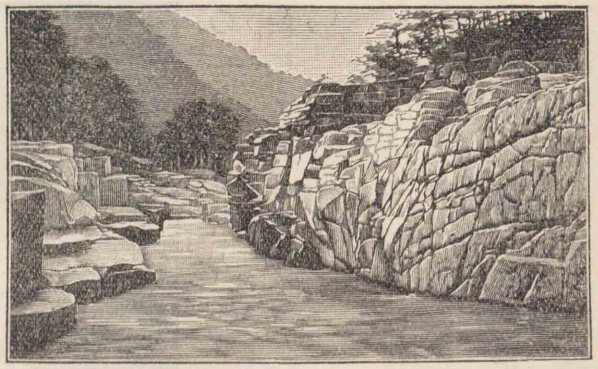
觀あるべく、その美は崇高の極なり。白絲の瀑壺につけば、玉簾の清風に搖ぐが如し。これは優美の趣をつくせり。憾むらくは、華嚴と同じくこれを日光に見ざることを。日光七十二瀑、數のみ多くして觀るべきものは少なし。されど水の美はほゞつくし得たり。

日光町の盡くる處、東照宮の杉林のはじまらんとする處清流白玉を散らす大谷川の上に、朱欄の神橋縹緲としてかゝれり。やゝ上れば含滿淵あり。水と岩と鬪ふの一奇觀を呈す。深澤・馬返あたりの溪流、境幽にして水清し。これより一里ばかりの

山を上れば、天下の大瀑華嚴瀑直下す。瀑の上には中禪寺湖あり。東西三里、南北一里、所謂山中の湖のやゝ大なるものなり。更に湖に注ぐ水を溯れば、龍頭瀑あり。瀑としては傾斜緩なれども、亦一奇觀なり。この水の上、湯瀑となる。長さ華嚴にゆづらず、幅はむしろ華嚴より廣けれど、傾斜の面にかゝりて、華嚴の如き雄壯の觀なし。湯瀑は直ちに湯の湖となる。中禪寺湖を五六分したるに過ぎざれども、幽趣は却つてまされり。湖畔の溫泉、硫化水素の異臭を放てども、なほ滯留して詩思を養ふに足るべし。日光四十八湖と稱す。されど中禪寺湖と湯の湖とにて、山中の湖の大觀をつくせり。こゝより更に白根をよぢ、五色湖を觀ずとも、神橋より溫泉まで六里の間において、靜水の美と動水の美とは、絕えず見ることを得べし。

動水の美は瀑のみならず、溪あり、溫あり、急流あり、ゆるき流あり、

寢覺の床



瀞八町

千里の江陵
李太白の詩句

終に海となる。溪流の奇は靜にして熊野の瀞八町となり、激して木曾の寢覺の床となり、石見の斷魚溪となる。船を下すべき急流にいたりては、富士川あり、最上川あり、球磨川あり。これを日本三大急流と稱す。なほ天龍川あるべく、木曾川あるべく、保津川あるべし。

一瞬に二三峰を送迎し、終に「千里の江陵一日に還る」の趣あり。

溪といひ急流といひ、その美

富士川
最上川
球磨川
天龍川
保津川

の一半は地形と巖狀とに待つ。耶馬溪や昇仙峽や、その奇景は巖山にあれど、水なくんば大いに落莫たるべし。（桂月全集）

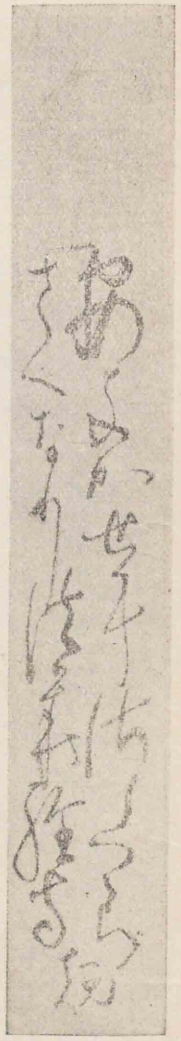
七梅檀

梅檀の實ばかりになる寒さかな　子規

麥畑やきざみあげたる春の山

子規筆蹟

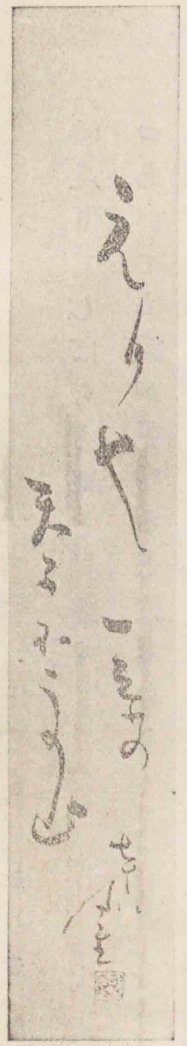
鳴雪
内藤素行



大風のしづかに下る雨のなか
富士晴れて黄なる蝶とぶ菜畑かな　鳴雪

鳴雪筆蹟

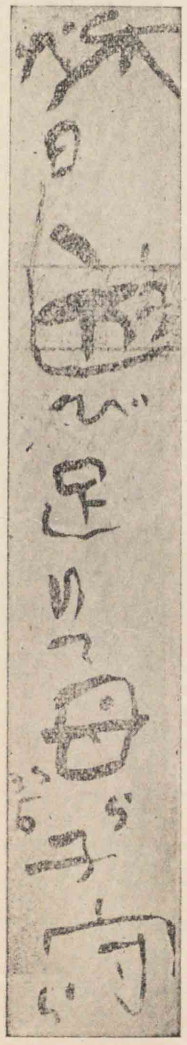
虚子
高濱清



薄氷の草をはなるゝ汀かな
遠山に日のあたりたる枯野かな　虚子

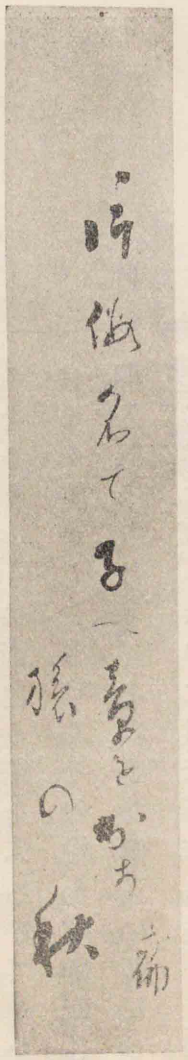
漱石　夏目金之助
紅葉　尾崎德太郎
碧梧桐　河東秉五郎
碧梧桐筆蹟

叩かれて晝の蚊をはく水魚かな　漱石
肩にきて人なつかしや赤蜻蛉　紅葉
睡足りてしばらく蠅と相對す
口あいて佐渡が見ゆると涼みけり　碧梧桐
五月雨やからす草ふむ水の中
石垣に鴨吹きよする嵐かな



乙字　大須賀　績
句佛筆蹟
句佛　大谷光演

花茨田水にひぢて咲きにけり　乙字
落葉ごと寒鮒網に入りにけり



松のほかに樹のなき岡の春日かな　句佛
田螺取蓴咲く田へ踏み移る

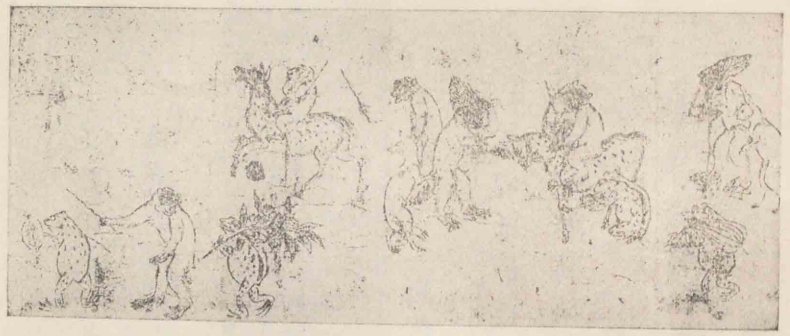
八　藝苑佳話

一　鳥羽僧正

鳥羽僧正
名は覺猷

鳥羽僧正戯畫

院
鳥羽法皇



鳥羽僧正は近き世にはならびなき繪かきなり。法勝寺の金堂の扉の繪かきし人なり。いつ程のことにか、供米の不法のことありける時、辻風の吹きたるに、米の俵を多く吹き揚げたるが、塵灰の如くに空にあがるを、大童小法師ばらが走りより取りとゞめんとしたるを、さまゞに面白う筆をふるひてかかれけるを、誰かしたりけん、その繪を院御覽じて御入興ありけり。その心を僧正に御たづねありければ、「あまりに供米不法に候ひて、實のものは入り候はで、糠のみ入りて輕く候ふゆゑに、辻風に吹き揚げられ候ふを、さりとては」とて、小法師ばらが取りとゞめんとし候ふが、をかしう候ふをかきて候」と申されければ、「比興のことなり」とて、それより供米の沙汰きびしくなりて、不法のことなかりけり。

（古今著聞集）

二 繪佛師良秀

繪佛師良秀といふ僧ありけり。家の隣より火出で來ておしおほひければ、大路に出でにけり。人のかかする佛もおはしけり。また物も打ちかづかぬ妻子なども、さながら在りけり。それをも知らず、身ばかりたゞ一人出でたるを事にして、むかひのつらに立てりけり。

火はやわが家に移りて、煙燄くゆりけるに、大方さりげなげにて眺めけるを、知音どもとぶらひけれども騷がざりけり。いかにと見れば、家の燒くるを見て、打ちうなづき打ちうなづきして、時々笑ひて、「あはれ、しつる所得かな。年頃わろくかけるものかな」といふ

御堂關白
藤原道長
四條大納言
藤原公任
長久二年歿
年七十六

時、とぶらひ來ける者ども、「こはいかに、かくてはあさましきことかな。物の憑き給へるか」といへば、「何條、物の憑くべきぞ。年頃不動尊の火燄をあしうかけるなり。はや見取りたり。これこそは所得よ。この道を立てて世にあらんには、佛をだによくかき奉らば、百千の家も出來なんずるものを、我黨こそ、このさせる能もおはせねば、物を惜しみ給へ」といひて、あざ笑ひて立てりけり。その後に、「良秀が『よぢり不動』とて、人々めであへりけり。（十訓抄）

三　和歌のほまれ

一　紅葉の錦

御堂關白、大堰川にて遊覽の時、詩歌の舟を分ちて、各堪能の人を乘せられけるに、四條大納言に仰せられて曰く、「いづれの舟に乘らるべきや」公任卿曰く、「和歌の舟に乘るべし」とて乘られけり。さてよめる。

匡衡卿
大江匡衡
文章博士
長和元年歿
年六十一

朝まだき嵐の山のさむければ
　もみぢの錦きぬ人ぞなき

後に言はれけるは、「いづれの舟に乘らるべきや」と仰せられしこそ心おごりせられしか。又、詩の舟に乘りて、これほどの詩を作りたらましかば、名を揚げてまし」と後悔せられけり。

二　關のあなた

匡衡卿わかかりける時、藏人にて、内裏をよろばひありきけるを、さる博士なれば、女房達あなどりて、御簾のきはによび呼せて、「これをひき給へ」とて、和琴を押出したりければ、匡衡とりもあへず、

逢阪の關のあなたもまだ見ねば
　あづまのことも知られざりけり

とよみたりけり。女房達、かへしもえせで苦りにけり。和琴をばあづまのことといふなり。

俊頼朝臣　源俊頼　堀河・鳥羽・崇徳の三朝に仕へた人

淀の渡のいづかたになきて行くらむ郭公淀のわたりのまだ夜深きに（壬生忠見）

高倉院　第八十代高倉天皇

頼政　源頼政　治承四年歿

三　淀のわたり

俊頼朝臣語りて曰く「白河院、淀の御方違（かたたがひ）の行幸ありけるに、五月ばかりの事にやありけむ。女房、殿上人の舟など數多ありけるに、暁になるほどに、向ひの方に郭公一聲ほのかに鳴きて過ぐ。俊頼一首詠ぜまほしく覺えしに、女房の舟の中に忍びたる聲にて『淀の渡のまだ夜ふかきに』とながめられたりし、時に臨んでめでたかりき。人々感歎して今に忘れず。新しく詠みたらむにはまされり」となむ言はれける。

四　弓張月

高倉院の御時、御殿の上に鵺の鳴きけるを、あしき事なりとて、いかがすべきといふ事にてありけるを、或人頼政に射させらるべき由申しければ、さりなむとて、召されて參りにけり。この由を仰せらるるに、畏まりて宣旨を承りて、心の中に思ひけるは、晝だにも小さき鳥なればえ難きを、五月の空、闇深く、雨さへ降りていふばかりなし。われすでに弓箭の冥加盡きにけりと思ひて、八幡大菩薩を念じ奉りて、聲を尋ねて矢を放つ。答ふるやうに覺えければ、よりて見るに、過たず中りにけり。天機より始めて、人々感歎いふばかりなし。後徳大寺左大臣、その時中納言にて、錄をかけられけるにかくなむ。

後徳大寺左大臣　藤原實定

郭公名をも雲居にあぐるかな
頼政とりあへず、
弓張月のいるにまかせて
とつけたりける、いみじかりけり。

民部卿定家　宮内卿家隆　何れも藤原氏　鎌倉初期の歌人

五　かたぶく月

近頃の歌仙には、民部卿定家、宮内卿家隆とて、一雙にいはれけり。そのころ、われもわれもと嗜む人々多かりけれど、いづれもこの二

後京極殿
藤原良經

人には及ばざりけり。

あるとき、後京極殿、宮内卿を召して、「この世に歌よみ多く聞ゆる中に、いづれかすぐれたる。心に思ふやうありのまゝに宣へ」と御尋ねありけるに「いづれとも分きがたく候」とばかり申して、思ふやうありげなるを「いかに、いかに」とあながちに問はせ給ひければ、懐よりたたうがみを落して、やがてまかり出でけるを御覽ぜられければ、

明けばまた秋のなかばも過ぎぬべし
かたぶく月のをしきのみかは

と書きたりけり。これは民部卿の歌なり。かねてかかる御尋ねあるべしとは、いかでか知らむ。もとより面白くて書きつけて、持たれたりけるなめり。これらぞ用意の深きたぐひなりける。

（十訓抄）

高山氏
樗牛はその號
評論家
文學博士
（明治三十五年
歿　年三十二）

日蓮上人と
その筆蹟

九　日蓮上人

高山樗牛

日蓮上人はひとり鎌倉時代のみならず、日本歴史上、各時代を通じて、類稀なる豪傑なり。實に上人は、宇宙第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて、滿天下の衆生を救はんとの大願をおこし、この大願の前には、如何なる迫害を被るともびくともせずと覺悟し、「法華經の爲にこの臭き頭を刎ねられんは、沙に黄金を換へ、糞に米を代ふるなり」と喝破し、眼中權勢もなく威武もなき、眞に高天濶地、獨立獨歩の大豪傑なりき。さりとて、豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる人情に乏しかりしかといふに、大いに

四條金吾
名は頼基
江馬遠江守
北條光時

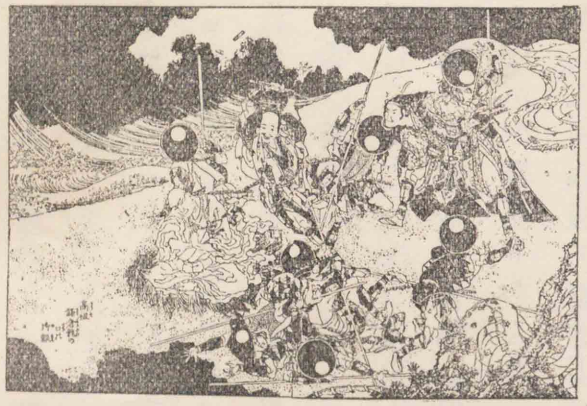
然らず。上人が人情に篤く恩誼に深く、その情、時としては禽獸の末にまでもおよびしことは、後世の人をして感涙に堪へざらしむるものあり。今左に一二の例を擧ぐべし。

上人の信者に、四條金吾とて、江馬遠江守の老臣ありき。この人武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して、上人の門下に列なり、不惜身命の覺悟を以て、上人と共にもろ〳〵の迫害を被れり。上人龍口にて斬られんとせし時は、路上に馬の轡を執りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は深くこの人の節義に感じ、後年幾多の消息文には、常に藹然たる恩愛の情を湛へたり。就中、「殿にして若し死後地獄に墮せられなば、日蓮もまた共に地獄に墮すべし。たとひ釋尊及び十方の諸佛手を引き袂を捉へて淨土に迎ふとも、振返つて必ず殿と共に地獄に墮すべし」との意を述べられたり。その恩愛の濃かなること喩ふべきものなし。天下の威武

（筆浦九田野）

法說社

を敵として、一歩も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面この兒女の涕涙ある、ことに貴ぶべきをおぼゆ。



龍口法難（葛飾北齋筆）

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明かに現れ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年、日本六十六個國島二つの内に、五尺に足らざる身一つを置く處なくして、身延山の深谷に隱るゝや、九個年の間、五十餘町の嶮山を、一日も缺かさず、一日に一度は必ず攀登りて、遙に上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳の中に、これと比較し得べき美談あるか。

波木井氏
名は實長

上人病篤くして、甲州の身延より武州の池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より、乗馬一匹に舍人一人を添へて遣はされけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に着きて波木井殿に送る書の中にも、馬をいろ〳〵いたはしく思ふ旨を書かれ、をはりに、「知らぬ舍人を附け候うては覺束なく覺え候。罷歸り候はんまで、この舍人を附け置き候はんと存候」と遊ばされたるなど、自身の病苦を厭はず、偏に一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は、人の爲しがたきことを爲すと同時に、人情に篤く恩愛にこまやかなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ偉人の業と心得るは、豪傑の半面をわすれたるものなり。この情愛なくば、かの豪邁もあらじ。かの豪邁あればこそ、この情愛もあるなれ。二者表裏し融會して、こゝに豪傑の全人格を作るなり。

かのうるはしき薔薇の織物を見ずや。表に花と刺と別々に織り成さるれども、その裏面を見れば、花を織る絲卽ち刺を織る絲なるにあらずや。（樗牛全集）

田山花袋

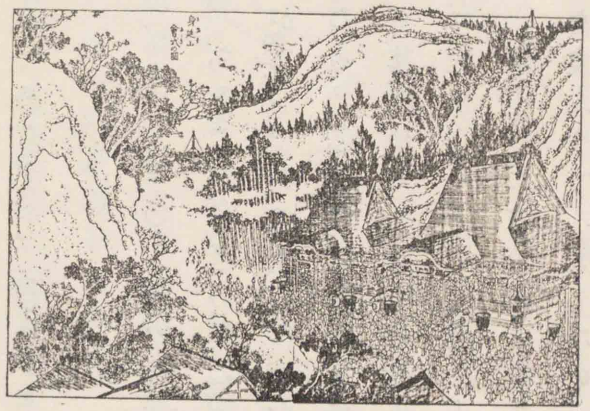
一〇　霧の身延

あそこが身延の奥の院のある處だといふ山には、赤く薙いだ處があつて、其の上には、面白いひよろ松が列を成して並んで生えてゐる。私は今日、其處まで行かうと思つてゐる。都合がよかつたら、其處から七面山の奥まで行かうとも考へてゐる。私は舟の中に跪坐して、そして其の山の近づいて來るのを眺めた。

波木井に來て、私は舟を乗捨てた。併し、其處は寂しい村で、午飯を食ふやうな家もない。仕方がないから、私は空腹を抱へながら身延の町へと志した。

波木井川に沿つて上つて行く路は、ちよつと鮮かな明るい感じ

がする。激湍の樣もよければ、溪の屈曲してゐる形も見事で、釣橋などが架かつてゐる。頓て久遠寺の最初の山門が、大きく前に現れて來た。



身延山會式の圖

多いといふ程でもないが、杉の大木が處々にあつて、それが到る處に涼しい蔭を作つてゐる。橋を渡つて、石ころのごろごろする歩きにくい路を五六町行くと、頓て寂しい身延の町が見え出した。

有名な寺のある町といふよりも、山の町といふ感じを、私は一番先に受けた。耳の立つた和犬、指物師の店、乾物屋、汚い旅館、呑氣さうに子供を負つて立つてゐる內儀さん、何年も挽いたことのないやうな壞れた車、さういふも

のが、歩いて行く私の眼に映つた。それに町はS字形に折曲つてゐて、それを過ぎると、上に高く杉の森と山の翠微とを背景にして、久遠寺の山門が高く町に臨んで立つてゐる。

一旅館に休んで、大急ぎで午飯を濟ました。床の間には、小笠原子爵の「ありがたや御法の風に拂はれて心にかゝる浮雲もなし」といふ歌の軸が掛かつてゐる。日蓮の修行地——さういふ感じが、何處となく私の胸に迫つて來た。ことに日蓮が晩年此の山に來て、寂しく一人苦行を積んだことは、私の心を動かさずには置かなかつた。

私は急いで出掛ける支度をした。奥の院まで五十町、其處までは是非行かなければならない。斯う思つて私は出掛けた。

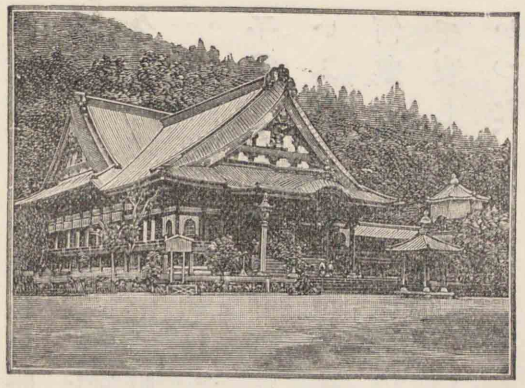
もう時計は四時に近い。それに宿を出る時には、今まで晴れてゐた空が俄に曇つて、凄じい黑い雲が一面に蓋をするやうに蔽ひ

懸かつた。奥の院のあるといふ山の上には、特に雲が凄じく暗く懸かつてゐる。

「お山は雨だな」こんなことを誰かが言つた。

長い石段を喘ぎ〳〵登つて、本堂から奥の院の方へ行く路に入つたときには、雨はもうぽつり〳〵落ちて來て、林の中は俄に暗くなつて行つた。杉・梅・落葉松、さういふ木の林の中を、路は縫ふやうにして次第々々に上つて行く。此の方の山の背から彼方の背に行つた時には、深い谷が一眸の下に展けた。それは、早川の谷と富士川との相合する處である。霧と雲とは附近の山々から湧くやうに渦巻上つて、見るが中に、さうした光景は其の中

久遠寺



に包まれて行つた。

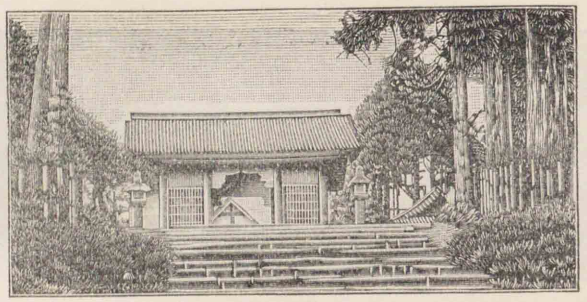
身延山の奥の院、それは誰でも行く處である、女子供でも行く處である。併し、私は、それを深い霧と凄じい雨と恐しい風との中に登つた。私は長い間、誰一人にも逢はなかつた。三光院に着いた頃には、雨はどしやぶりになつて、霧の爲に一間先も見えぬぐらゐであつた。いろは四十八曲を通つた時の凄じさは、今でも私の眼の前にある。登つて行くに連れて、風は強くなり、雨は烈しくなり、霧は深くなつた。或岩角では暴風に遭つて、私の蝙蝠傘は危く松茸のやうになつて了はうとした。

流石は日蓮のゐた山だといふやうな氣がした。荒山、實際荒山である。社會と闘つた日蓮は、更に此の大自然とも闘はうとしたのである。私は、こんなことを思ひながら歩いた。一歩は一歩より嶮しく、路は岩角から岩角へとついてゐた。時計を見るともう

五時半である。五十町、それぐらゐの路は譯はないと思つて來た私も、何時の間にか思はぬ時間の經つてゐるのに驚いた。三十五町の標木は、もう少し前に過ぎて來た。

雨は雲霧を破つて、ところどころ縞のやうに見える。山の巓の樹木は凄じく鳴り響いて、天地の神祕が、何か凄じい物を私の前に見せるかと思はれる。一町、二町、五町、お水屋に行つた時には、もう日はすつかり暮れて、仄明るい薄暮の光が、微に霧の中に殘つてゐるばかりであつた。

頓て四十五町目の標木を過ぎた頃、ふと私は耳を敬てた。「ドンドコ、ドンドコ」。お題目の音である。それを聞いた時の崇高な感じを、私は今でも忘れることが出來ない。深い雲霧の中に、凄じい暴風雨の中に、こんな山の上に、さうした勤行をしてゐる人達のことが、急に胸に迫つて來た。



平日なら何でもないであらうが、深い霧と雲の中では、堂も杉も山門も、すべて他界の光景のやうに私には思はれた。寂しい庫裡の中にゐる尼、圍爐裏の火を赤く燃やしてゐる小僧、暗い本尊の前にちらちらする蠟燭、それはすべてベルギーの作家の舞臺面を、私に思はせるに十分であつた。

私は、頓て庫裡から奥の院の方へと行つた。其處には、日蓮がはるかに故郷を望んで、亡親を思慕したといふ遺蹟があつた。奥の大きな堂には開かぬ扉があつて、お題目の勤行の音は、其處から四邊に響いてきこえた。霧が白くあたりを流れた。（花袋全集）

雲と落日

一一

雲と落日

今太陽が沈むところで
西の空は真紅と雲と紫の色の美しさだ
あの幾十里を広廣袤を貫いて
かなりの風が荒れ狂ってゐるらしい
怒濤のやうな巨大な雲が
どんどんもくもくと猛烈に湧き立ってゐる
黄塵の中に真黒な
紗幕を上げて嵐のやうに襲ってゐる
迫ってきて抱き合って燦々と砕ける雲
滾々なる雲のまばゆい層になって

尾崎喜八

壓迫的にのしかかる上の方の雲
一つとして弱いものはなく
優しいのやだらしたのは一つもなく
勝つぶつの強いえりぬきの荒くれたのが
筋骨をぶつつけ合って格闘してゐる
まるで窮鼠猛獣の激と激の肉弾戦だ
あちこちの中で燦々と輝く巨大な太陽
群一つしなくて
あの平和な乱闘に君臨してゐる太陽
あゝ戦風に満ちて燦々と雲の球(沈んで
ゆく)荘厳な夜の

(空と樹木)

一二　夢の國

谷崎潤一郎

うつむいて、足許を見詰めながら歩いて居た私は、其の時ふと、洞穴のやうな狹い所から、ひろ〳〵した所へ出かゝつて居るやうな氣がしたので、何氣なく顏を擡げた。まだ松林は盡きないけれど、そのずつと向うに、遠眼鏡を覗いた時のやうに、圓い小さい明るいものがある。尤もそれは燈火のやうな明るさではなく、銀が光つて居るやうな、鋭い冷たい明るさである。

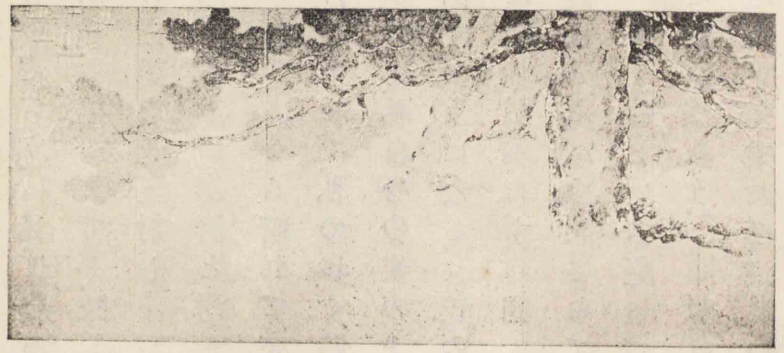
「あゝ月だ。海の面に月が出たのだ。」

私は、直ぐとさう思つた。ちやうど正面の松林が疎らになつて、窓の如く隙間を作つて居る向うから、その冴返つた銀光が、ピカピカと、練絹のやうに輝いて居る。私の歩いて居る路は、いまだに暗いけれど、海上の空は雲が破れて、其處から皎々たる月がさして居

るのだらう。見て居るうちに、海の輝はいよ〳〵增して來て、この松林の奥へまでも、眩しいほどに反射する。何だか斯う、きら〳〵と絶間なく反射しながら、水の表面が、ふつくらと膨れあがつて、滿滿たる潮が、澎湃と湧き騷いで居るやうに感ぜられる。

海の方から晴れて來る空は、だん〳〵とこの山蔭の林の上へも押しよせて、私の歩く路の上も、刻一刻に明るくなつて來る。しまひには、私自身の姿の上にも、青白い月が、松の葉影をくつきりと染出すやうになる。丘の突角は、次第に左の方へ遠退いて行つて、私は知らず識らずの間に、殆ど不意に、林の中から、渺茫たる海の前景のほとりに立たされてしまつた。

あゝ何といふ絶景だらう。何といふ神祕を極めた、莊嚴を極めた景色だらう。——私は暫く恍惚として其處に彳んで居た。私のあるいて來た街道は、白波のよせてゐる海岸に沿うて、長汀曲浦の



青松白砂（寺崎廣業筆）

續くかぎり續いて居る。此處は全體、三保の松原か、田子の浦か、住江の岸か、明石の濱か、――とにもかくにも、それ等の名所の繪端書で見覺のある、枝振の面白い磯馴松が、街道のところ〴〵に、鮮かな影を、斜に地面へ印して居る。街道と波打際との間には、雪のやうに眞白な砂地が、多分凸凹に起伏して居るのであらうけれど、月の光があんまり隈なく照つて居る爲に、その凸凹が、少しも判らないで、唯平べつたく、なだらかに見える。その向うは、大空に懸かつた一輪の明月と、地平線の果まで展開してゐる海との外に、一點の眼を遮るものもない。

先刻、松林の奥から見えたのは、ちやうど其の月の眞下に方つて、最も強く光つて居る部分なのである。其の海の部分は、單に光るばかりでなく、光りつゝ、針金を綟ぢるやうに動いて居るのが判る。或は動いて居る爲に、一層光が強いのだといつてもよい。其處が海の中心であつて、其處から潮が渦卷き上るために、海が一面に膨れ出すのかも知れない。何しろ、その部分を眞中にして、海が中高に盛りあがつて見えるのは事實である。盛りあがつた所から、四方へ擴がるに隨つて、反射の光は、魚鱗の如く細々と打碎かれ、さゞれ波のうねりの間に、ちら〳〵と交り込みながら、汀の砂濱までしめやかに寄せて來る。どうかすると、汀で崩れて、ひた〳〵と砂地へ這ひあがる水の中にまでも、交り込んで來るのである。

その時、風はぴつたりと止んで、あれほどざは〳〵と鳴つて居た松の枝も、響を立てない。渚に寄せて來る波までが、この月夜の靜

寂を破つてはならないと力めるかの如く、かすかな、遠慮がちな、囁くやうな音を聞かせて居るばかりである。それは例へば、女のしのびなきのやうな、蟹が甲らの隙間から、ぶつ〳〵と吹く泡のやうな、消入るやうにかすかではあるが、同時にまた綿々として盡きることを知らない、長い悲しい聲にきこえる。

明月（山内多門筆）

そのこゑは「聲」といふよりも、寧ろ一層深い「沈默」であつて、今宵のこの靜けさを、さらに神祕にする情緒的な音樂である。……

誰でも、こんな月を見れば、

永遠といふことを考へない者はない。私は子供であつたから、永遠といふはつきりした觀念はなかつたけれども、しかし何かしら、それに近い感情が、胸に充ち〳〵てくるのを覺えた。——私は、前にもこんな景色を、何處かで見た記憶がある。しかもそれは一度ではなく、何度も〳〵見たのである。或は、自分がこの世に生まれる以前の事だつたかも知れない。前世の記憶が、今の私に蘇つて來るのかも知れない。それともまた、實際の世界でではなく、夢の中で見たのだらうか。夢の中で、これとそつくりの景色を、私は再三見たやうな心地がする。さうだ、確に夢に見た事があるのだ。二三年前にも、ついこの間も見た事があつた。さうして實際の世界にも、その夢と同じ景色が、何處かに存在して居るに違ひないと思つて居た。この世の中で、いつか一度は、その景色に出遇ふことがある。夢は、私にこれを暗示して居たのだ。その暗示が、今や事實

となつて、私の眼の前に現れて來たのだ。

波さへ遠慮がちにうち寄せて居るのだから、私もなるべくなら靜かな足どりで、ゆつくりと、盜むが如く歩いて行きたかつた。が、どういふ譯か、私は妙に興奮して、海岸線に沿うた街道を、急ぎ足に、逃げるが如く歩を運んだ。周圍の物象が、あまりしーんとして居るので、何だか恐しかつたのでもあらう。うつかりして居ると、自分も、あの磯馴松や砂濱のやうに、ぢつとしたきり、凍つたやうになつて、動けなくなるかも知れない。さうして、この海岸の石と化して、何年も〳〵、あの冷たい月光を、頭から浴びて居なければなるまい。實際今夜のやうな景色に遇ふと、死ぬといふことも、そんなに恐しくはないやうになる。——多分この考が、私を興奮させるのであつたらう。

「凄ない月の光が、天地に照り渡つて居る。さうしてその月に照らされる程の者は、悉く死んで居る。たゞ私だけが生きて居るのだ。私だけ生きて動いて居るのだ」。

さういふ氣持が、私を後から追ひたてるやうにした。追ひたてられゝば追ひたてられるほど、私はいよ〳〵急き込んで歩いた。すると、今度は私ひとりが急き込んでゐるといふ事が、それが恐怖の種になつた。息切れがして苦しいので、ひよいと立ちとまると、否でも應でも、あたりの景色が眼に這入つて來る。凡ての物は依然として閑寂に、空も水も遠い野山も、縹渺たる月の光に蕩け込んで、その青白い靜かさといつたら、活動寫眞のフィルムが、中途で止まつたやうである。街道の地面は、さながら霜が降つた如く眞白で、その上に、鮮かな磯馴松の影が、路端から這ひだした蛇のやうに横たはつて居る。松と影とは、根元のところで一つになつて居るが、松は消えても、影は到底消えさうもないほど、影の方がはつきり

して居る。影が主であつて、松は從であるかのやうに感ぜられる。その關係は、私自身の影においても同じであつた。ぢつと佇んで、自分の影を長く視詰めて居ると、影の方でも、地べたにねころんで、ぢつと私を見上げて居る。私の外に動くものは、たゞこの影ばかりである。

「私はお前の家來ではない。私はお前のお友達だ。あんまり月が好いもんだから、ついうか〳〵と、此處へ遊びに出て來たのだ。お前もひとりで淋しからうから、道づれになつて上げよう」と、影は、そんなことを話しかけて居るやうにも思はれる。

私は、さつき電信柱を數へたやうに、今度は、松の影を數へながら歩いて行つた。街道と波打際との距離は、折々遠くなつたり近くなつたりする。ある時は、濱邊をひた〳〵と浸蝕する波が、もう少しで、松の根方を濡らしさうに押しよせてくる。遠くを這つて居

る時は、薄い白繻子を展べたやうに見えるが、近くに寄せてくる時は、一二寸の厚みを持つて、湯に溶けたシャボンの如くに盛りあがつて居る。月はその一二寸の盛りあがりに對してさへも、ちやんと正直に、その波の影を砂地へ映して見せて居る。

實際こんな月夜には、一本の針だつて、影を映さずには居ないだらうと思はれた。（母を戀ふる記）

一三　吉田松陰

徳富蘇峰

吉田松陰は天成の鼓吹者なり、感激者なり。彼自ら己を空しうして、他の善を採るを禁ずる能はざるのみならず、また他をして、覺えず彼の精神・意氣に同化するを禁ずる能はざらしむる力を有す。これ彼が教育家としての特色なり。その踏海の策破れて下田の獄に繫がるゝや、獄卒に說くに、自國を尊び外國を卑しみ、綱常を重

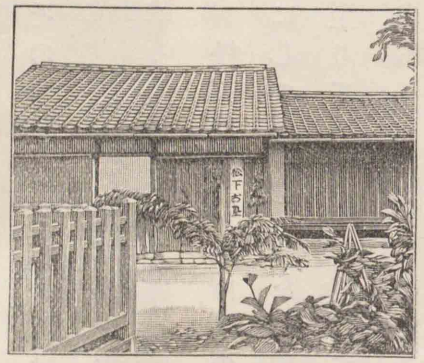
吉田松陰とその筆蹟

んじ彝倫を敍づべきを以てし、狼の目より涙を流さしめたり。その下田より檻輿江戸に赴き、途、三島を經るや、警護の下人にむかひ大義を說き、人獸相距る遠からざる彼等をして、憤勵の氣、色に現れしめたり。その江戸の獄に在るや、いふまでもなし。後送られて長門野山の獄に投ぜらるゝや、その感化は同囚者に及び、獄卒に及び、遂にその司獄者までも彼が門人となるに至らしめたり。彼が在る所、四圍みな彼が如き人を生ず。これ何によりて然るか。薔薇の在る所、土も亦香しといふにあらずや。而して彼が最もその

松下村塾

鼓吹者たり、感激者たる特質を顯したるは、松下村塾においてこれを見る。

松下村塾は、德川政府顚覆の卵を孵化したる保育場の一たり。維新改革の天火をもやしたる聖壇の一なり。笑ふなかれ、その火、燐よりも微に、卵、豆よりも小なりと。赤間關の砲臺は粉にすべし。奇兵隊の名は滅すべし。然れども松下村塾に至りては、ひとり當時に偉大なる結果を遺せるのみならず、流風遺韻、今に至るまで、なほ人をして欽仰・歎美の情禁ずる能はざらしむるものなり。



彼は安政二年十二月、野山の獄より出でて、家に蟄居せしめられたり。而してその安政三年七月に至つては、蟄居中、更に家學を授くる許をうけたり。その名義とする所は山鹿流軍學なりと雖も、その實は然らず。彼はいはゆる專門的兵法家にあらず。彼は改革家なり。その敎ふる所は改革の精神なり。その講ずる所は改革の偉業なり。

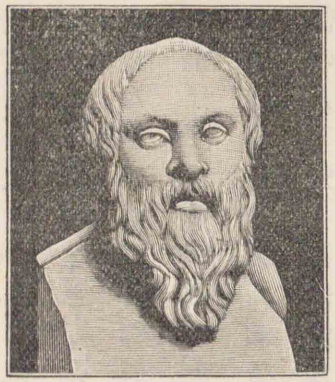
松下村塾の名は、その叔父玉木文之進がその村學に用ひたる所にして、松陰これを襲用したりと雖も、吾人がいはゆる松下村塾に至りては、松陰を推してその開山とせざるべからず。蓋し、松陰が自ら松下村塾に直接の關係を有したるは、僅に安政二年の七月より安政五年の十二月までにして、卽ちその歲月は二年半に過ぎず。而してこの二年半の歲月が、未來における日本の歷史に、千波萬濤の激起點となりたるは何ぞや。

朱熹

白鹿洞の先生支那宋代の學者朱熹

橄欖林の夫子ギリシヤの哲人ソクラテス

ソクラテス



彼は、何を以てかくの如き大感化を及ぼしたるか。曰く、その人にあり。曰く、その時勢にあり。曰く、その敎育の目的にあり。曰く、その敎育の方法にあり。

彼は、精を極め微に入る白鹿洞の先生にあらず。彼は、宇宙を呑み幽明を窮むる橄欖林の夫子にあらず。彼はわづかに、二十七歲の壯者にして、要するにこれ白面の一書生のみ。彼が實力よりも多くの感化を人におよぼし、彼が人物と匹敵する、或點においてはむしろ彼よりまされる弟子をいだしたるは何ぞ。「知己の感」この一語、これを說明してあまりあるべし。

彼は、造化兒の手に成りたる精神的爆裂彈なり。一たび物に觸着すれば、轟然として火星を飛ばす。この時においては物も亦碎け、彼も亦碎く。彼の全體は、燃質を以て組織せられたり。火氣に接すれば忽ち焰となる。その焰となるや、銀も鎔かすなり、金も鎔かすなり、瓦も鎔かすなり。彼の人に接するや、全心を擧げて接す。彼の人を愛するや、全力を擧げて愛す。彼は往々インスピレーションの爲に精神的高潮に上る。而してこれを以て他に接し、他を導いてこの高潮に接せしむ。知るべし、彼が教育の道多岐なし、たゞ己が眞骨頭、大本領をのべて以て他に及ぼすのみなるを。

彼は變則なるペスタロッチなり。彼は實物教育の大主義を踐行せり。たゞペスタロッチに異なるは、一は天地萬有を以て實物教育の資となし、他は活世界の時事を以て實物教育の資となしたるのみ。その嬰兒の如き赤心を以てその子弟を愛し、自ら彼等の仲間

ペスタロッチ
スキスの有名な教育家（西紀一七四五―一八二三）

ペスタロッチ

となり、彼等の中に住し、彼等の心の中に住するに至りては、二者豈軒輊あらんや。

彼の門人を遇する、一に赤心を以てす。至誠にして動かざるものいまだこれあらずとは、彼が人に接し物を待つ金誠なり。彼は能く言ふよりも、寧ろ能くこれを行へり。單にこの一點においては、東西古今を通じて、彼に優る教育家を見出だす事、決して容易の業にあらず。而してこの精神を以て、その所信を他に施す。故にその傳道心に至りては、この山を彼處に移す程の勢力ありしなり。彼が眼中敵もなく味方もなく、たゞ彼が濟度すべき衆生あるのみ。彼は社會の寵兒にあらず。彼の子弟も亦然りき。彼等は恰も、雪を踏んでアルプス嶺を攀づ

る旅客の如し。その隆冬苦寒を凌がん爲には、互に負戴し抱擁し、自己の體溫によりてその呼吸を保たざるべからず。艱難は同情を生じ、同情は恩愛を生ず。先生前に倒れて、弟子後に振ふ。彼は知己の感を以て、その子弟を陶冶せり。彼は活ける模範となりて、子弟に先だちて難に殉ぜり。否、子弟の爲に難に殉ぜり。この時において、懦夫と雖もなほ起つべし。況や平生の素養ある者においてをや。況や恩愛の情、知己の感ある者においてをや。彼はその子弟にむかつて、「我が如くなせ」といへり。而してなせり。彼等豈徒爾にして止まんや。

その時を以てすれば二年半に過ぎず。その處を以てすれば、萩城の東郊に在る杉氏邸内の八疊の矮屋にして、その特に增築したるものも、別に十疊半の一室を加へたるに過ぎず。しかもこの中より、無數の活劇と、活劇をなしし大立者とをいだしたる所以のもの、豈その由る所なくして然らんや。世或は一人を以て興り、一人を以て亡ぶ。個人の社會に及ぼす勢力も、また輕視すべからざるなり。（吉田松陰）

吉田松陰
通稱寅次郎
長州の志士
（安政六年刑死
年二十九）

一四　妹にさとす

吉田松陰

この間は御文下され、觀音樣の御洗米、三日の中精進にて戴き候樣との御こと、御深切の御志感じいり申候。精進潔齋などは、隨分心のかたまり候ふものにて、宜しき事と存候につき、拙者も二月二十五日より三月晦日まで少々志の候へば、酒肴ども一向食べ申さず候。その間、一度靈神樣御祭の物頂戴致候ふばかりに御座候。まして三日の精進は、さまでむづかしき事にも無之、御深切の事に候

へば、相果たしたく存候へども、當所にては、當前の精進の外に又精進と申候うては、連中又は番人ども、何故かと怪しみ尋候につき、それをそれと相答へ候事面倒に存候故、八日は幸ひ精進日なれば、その日一日に戴申候抑、觀音様信仰せよとの事は、定めて禍をよけ候爲なるべく、是には大いに論のあることに候へば、委細申進ずべく候。

觀音（能阿彌筆）

法華經第二十五の卷、普門品と申す篇に、觀音力と申すこと高大に述べて有之候。大意は觀音を念ずる時は、繩目にかゝり候へば、忽ちぶつ〳〵と繩がきれ、人屋へ捕はれ候へば、忽ち鎖・鍵が外れ、首の座に直り候へば、忽ち刃がちんぢに折るゝなど申して有之候。是は拙者、江戸の人屋にて、この經は幾度も繰返し讀みて見候へども、始終この趣に候。それ故、凡人はこれより有難き事はなしとて、信仰するも無理はなく候。さりながら、佛の教は奇妙なる仕懸にて、大乘・小乘と二つにわかちて、小乘は下根の人への教、大乘は上根の人への教と定め有之候。小乘にて申候へば、觀音は右の經文の通のものと心得、ひたもの信仰せしむることに御座候。是は人に信をおこさする爲なり。信をおこすとは、一心に有難い事ぢやとのみ思込み、餘念・他慮なき事にて、一心不亂と申すもこの事なり。人

は一心不亂になりだにせば、何事に臨み候うても、ちつとも頓着なく、繩目も人屋も首の座も平氣になられ候故、世の中に如何に難題・苦患のきたるとも、それに退轉して不忠不孝、無禮無道等仕る氣遣はなし。　されど、初より凡夫に、一心不亂ぢやの不退轉ぢやのと申聞かせても、少しも耳に入らぬもの故に、假に觀音樣を拵へて人の信をおこさせ候教に御座候。　これを方便とも申候。

扨また大乘と申すときは、出世法と申すことが肝要に御座候。　出世と申候うても、立身出世など申事には御座なく候。　その初は、釋迦が天竺王の若殿に候ひし處、若き時より感の強き人にて、老人を見ては、我が身も往く先は老人にならんと悲しみ、死人を見ては、我が身も往く先は死

なんかと悲しみ、蟲けらの死にたる、草木の枯れたる迄に悲しみを發し、生老病死がこの世の習なれば、是非にこの世を出でねばすまずと志を立てて、年二十五の時、位を棄てて山に入り、右の生老病死を免るゝ修行をしに參られ候。　さ候うて、三十出山として、わづか五年の間に生老病死を免るゝ事を悟り、生まれもせねば老もせず、病みも死にもせぬ事を悟つて出で來て、それより世の人を教化せられたり。　是が即ち出世法なり。　故に、出世せねば濟世の出來ぬと申すもこの事なり。　濟世といふは、即ちこの世の人を濟度することに御座候

さてその死なずと申すは、近く申さば、釋迦の孔子のと申す御方々は、今日まで生きて居らるゝゆゑ、人が尊みもす

れば有難がりもし、恐れもするなり。果して死なぬに候はずや。死なぬ人なれば、繩目も人屋も首の座も前申す觀音經の通には候はずや。楠木正成とか、大石良雄とか申す人は、刃ものに身を失はれ候へども、今以て生きて居らるゝなり。即ち刃のちんぢに折れたる證據なり。

さて又「禍福繩の如し」といふ事を御悟なさるが宜しく候。禍が福の種、福が禍の種に候。「人間萬事塞翁が馬」に御座候。拙者など人屋にて死ぬることに候へば、禍のやうなるものに候へども、また一方には、學問も出來、己のため、人のため、後の世へものこり、かつ〳〵死なぬ人々の仲間入も出來候へば、福この上もなき事に候。人屋を出で候へば、また如何なる禍の來んも知れ申さず候。勿論、その禍

艶妹
敏弟 敏三郎

の中には、また福も交り候へども、所詮一生の間、難儀だにせば、先には福あるべし。何の効驗もなき事に、觀音に、頼みて福を求むるやうのことは、必ず〳〵無益に存候。

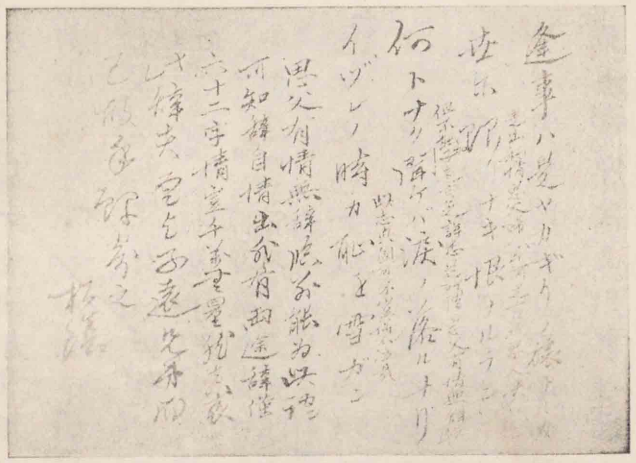
尤も右の通に申候へば、身勝手なる申分、不孝なる申分と御考あるべきか。こゝにまた論あり。易の道は滿盈と申すことを大いにきらふなり。御互に七人兄弟の中、拙者は罪人、艶は夭折、敏は啞子、ふざまのわろきやうな者なれど、あと四人は何れもかなりに世を渡られ、特に兄様、そもじ、小田村は兩人づつも子供があれば、不足は申されず。世の中の、六七人も兄弟ある家を見比べよ。是程にも參らぬ家は多きものぞ。近くは、そもじの家にても、高須などにても、兄弟の中には、ふざまのわろき人も隨分あるな

山宅
父杉常道隠居の地

り。然れば、父母兄弟の代に、拙者・艶・敏の三人が禍を受くるにこそと思涙はば、父母様の御心も濟まるゝ譯には候はずや。かつ、杉は隨分多福の家なれば、拙者の身の上よりは、却つて杉が氣遣なるものならずや。拙者身の上は前に申す通、つめが牢死、牢死しても死なぬ仲間なれば、後世の福は隨分なれど、杉は今にては御父子とも御役にて、何の不足もなき中なれば、子供等がいつもこの様なるものと思ひて、昔、山宅にて父様・母様の晝夜御苦勞なされたる事を話して聞かせても、眞とは思はぬ程なれば、この先五十年七十年の事を、とくと手を組んで案じて見られよ、氣遣なるものにては候はずや。去年も、端午に客の多きを、人は「めでたし〳〵」と嬉しき顔をすれど、拙者は、何分先

小太郎
兄民治の子

吉田松陰筆蹟



の先が氣遣にてたまらぬゆゑ、始終稽古場に屈みて、人の知らぬ處にては、ひとり落涙したる程の事なりき。もしや萬一、小太郎が父祖に似ぬやうなる事あらば、杉の家も危し〳〵。父母様の御苦勞を知つて居るもの、兄弟にてもそもじまでぞ。小田村にてすら、山宅の事はよくは覺えて居るまじ。まして久坂などはなほ以ての事。されば拙者の氣遣に觀音様を念ずるよりは、兄弟・甥・姪の間に「樂は苦の種、福は禍の種」と申

す事を、とくと申聞かする方が肝要なり。

なほまた一つ、拙者不孝ながら孝にあたることあり。兄弟のうちに一人にてもふざまのわろき人あれば、あとの兄弟も自然と心が和ぎて孝行するやうになり、兄弟も睦じくなるものなり。これより拙者は、兄弟の代にこの世の禍を受合ふゆゑ、兄弟中は拙者の代に父母様へ孝行してくるゝがよし。さすれば、つゞまるところ兄弟中は皆よくなりて、果は父母様の御仕合、また子供が見習ひ候へば、子孫の爲、これ程めでたき事はなきにあらずや。よく御勘辨候うて、小田村・久坂なんどにもこの文御見せ、よく佛法信仰はよき事なれど、佛法に迷はぬやうに、心學本なりと折々御見候へかし。心學本に

柴田鳩翁
通稱謙藏
京都の心學者
（天保十年歿年五十八）

のどけさよ願なき身の神まうで
神に願ふよりは、身に行ふが宜しく候。　（吉田松陰全集）

一五　壺と提灯

柴田鳩翁

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ町役・家持の人々、一同に座に着きまするとさま〴〵の馳走がある。時にかの年寄は、酒と聞いては笹の露にも醉ふほどの下戸ぢや。座中を廻る盃の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なりとも御取り下されい」と、南京の古染附の壺に大輪の金米糖を入れて、年寄の前へ持つてくる。座中も「これはよいお心づき、ひらにお菓子を召しあがれ」とすゝむるに、年寄もわるうはなし、「しからば頂戴を致しませう」と壺を引きあげ、手首を突つこみしな

景清と美保の谷

惡七兵衞景清
美保の谷十郎

に、少しきしむやうに覺えたが、無理に手をさし入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて拔けませぬ。どうぞして、拔けるかと色色にこじまはして見ても、引つぱつて見ても拔けず、まご〳〵して居らるゝと、側から見つけて、「どうなされましたぞ」。「いや手が少し詰まりまして思ふやうに拔けませぬ」と、眞顏になつていはるゝ。「それは氣の毒。私が壺を持つて居ませう。無理無體に手をお引きなされ」と、一人が向うへまはつて壺をつかまへ引合ふ有樣、景清と美保の谷が鐵曳をするやうなと、座中が一同にどつと笑へど、年寄はなか〳〵笑はず、泣顏になつて、「どうも痛んで拔けませぬ」といふ。さあこれから大騷になり、「醫者どのを呼んで來い。骨接ではゆくまいか」と、酒宴の興も醒め果てました。

時に五人組が一人進み出で、「いづれもお騷ぎなさるな。われら承つたことがある。『昔、司馬溫公といふ人、幼きとき大勢の小兒と

司馬溫公
名は光
字は君實
溫公は諡
宋の名相

溫公壺を破る

共に、大いなる壺のほとりに遊びましたが、一人の小兒誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃げ歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、側なる手ごろの石を取つて、かの壺へ投げつけましたれば、壺は割れて、はまつた小兒は不思議に命を助かりました』と、或人の話ぢや。今お年寄の御難澁はこの話によう似てある。いざや、われらが司馬溫公となつて、たとへばその古染附の壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ」と、しかつべらしく煙管をひつさげ向うへまはれば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突出すと、只一打にうち碎いた。何がさて、座中は金米糖がちらかつ

て雪を降らしたやうになると、「やれお年寄お助かりなされたか」と、その手を見れば、拔けぬこそ道理なれ。　金米糖を一杯攫んでゐられたと申すことぢや。　なんと可笑しい話ではござりませぬか。

攫んだものを放しさへすれば、自由自在に手は拔けたものを、一度攫んだら首がちぎれてもはなすまいと、片意地な生まれつき、それで自由自在の大安樂が出來ぬのぢや。　かく申せば錢金の事のやうなれど、攫むものはこれればかりではない。　器量のよいのを攫み、賢いをつかみ、貧惜をつかみ、家柄をつかみ、身代のよいを攫んで、放すまいとかつぎ歩くによつて、敎を聞くこともならず、樂をすることもならず、愼も出來ず、せん方なさに癪氣抑へたり、顏しかめたり、酒飲んで紛らしたり、さりとては氣の毒なものでござります。　壺割つてしまうてからは、何いうても詮ないことぢや。　身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。

それでもわが本心は明かな、明德は曇つてはない、洗濯するには及ばぬと思ふ人があるものぢや。　これを喩へて申しまするに、私のやうな盲が一人旅をして、心やすい旅籠屋にとまり、「あすの朝は七つ立をさして下され」と賴む。　亭主も心得、朝はやう立たせまする時、盲は旅の支度をとゝのへ、杖を持つて出ようとすると、亭主がいふには、「まだ夜深いに提灯をお持ちなされ。　お貸し申しませう。」「何をいはしやるやら、盲が提灯を持つて何にするもので。」「いえいえ、お前には入りますまいけれど、暗がりをとぼ〳〵御出なさるゝと、往來の人がゆきあたりまする。　それで提灯をお持ちなされと申すことぢや。」「なるほどさうぢや、私は行きあたらねども、えて目明がつきあたる。　さやうならお貸し下されい」と、提灯さげて道五六町出ましたところが、向うから來る人が盲にはたと行きあたりました。

そこで大きに腹を立てて、「おれに突きあたるやつは盲か。」向うの人も疳癪に障り、「おれは盲ではない。さういふおのれがどう盲ぢや。」「いや〳〵おれは盲ぢやけれども、人には突きあたらぬ。おのれが盲に極まつた。」向うの人も愈腹立て、「おれを盲といふ證據は、何ぞ覺えがあつていふのか。」「おゝ覺えがある。おのれを盲といふ證據は、この持つてゐる提灯が、おのれが目にはかゝらぬぢやないか」と、ずつとさし出す提灯の火は、とうに宿屋の門口で消えてしまうてある。

なんと氣の毒な盲ではござりませぬか。火もともさぬ眞暗な提灯をさげて、これでも明かなと思うてゐるのは、本心見失うて身勝手な心を、本心ぢや本心ぢやと思ひ、洗濯せうとも愼まうとも思はぬ人に、よう似たものでござります。どうぞお互に、火は消えてはないかと、日々に吟味が致したいものでござります。（鴆翁道話）

曉月房
藤原爲守
（嘉暦三年歿）

松永貞德
號け長頭丸
（承應二年歿）

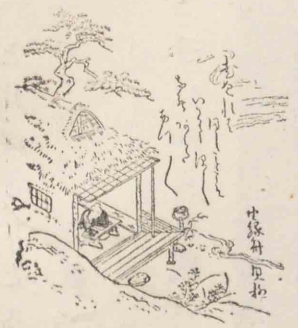
貞柳筆蹟

鯛屋貞柳
榎並善八
大阪の人
（享保二十年歿）

一六　さる歌よみ

曉月に毛のむく〳〵とはえよかし　曉月房

さる歌よみと人にいはれん　松永貞德



月ゆゑにいとゞ
この世にゐたきかな
土の中では
見えじと思へば　鯛屋貞柳

世の中はかりの世なれどかりにくし

内山椿軒
通稱傳藏
江戸の儒者
（天明八年歿）

四方赤良
太田覃
またの號蜀山人
江戸幕府の士
（文政六年歿）

赤良筆蹟

唐衣橘洲
小島泰從
田安家の士
（享和二年歿）

夢の世なれどさうも寢られず
とればまたとるほど損のゆく年を
くるゝ〳〵とおもふおろかさ

内山椿軒

四方赤良

子は知らぬ親の心のそめゆかた
盆前胸のをどるおもひを
かくばかりめでたく見ゆる
世の中を
うらやましくや
のぞく月影

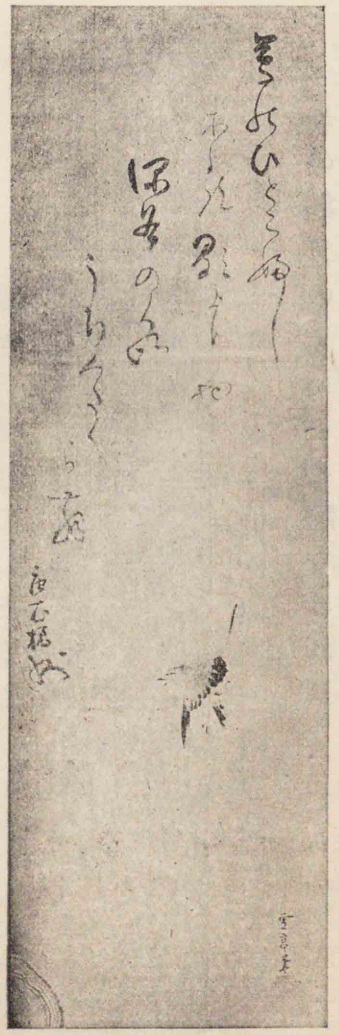
唐衣橘洲

いたづらにたゞの親父になりひさご

橘洲筆蹟

白鯉館卯雲
木室定記
江戸幕府の士
（文政十三年歿）

平秩東作
立松東蒙
江戸の儒者
（寛政元年歿）



身の能とては酒のいれもの

白鯉館卯雲

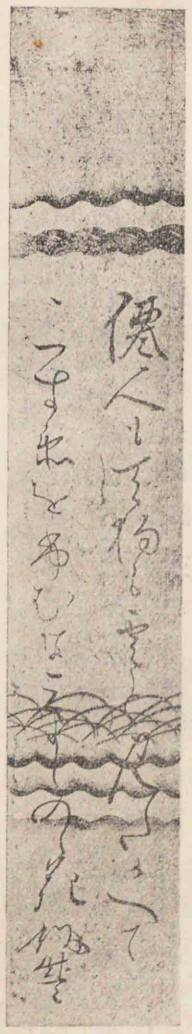
ほたる火を窓にあつめてもの讀むは
川邊の草のくされ儒者かも

平秩東作

男なら出て見よ雷にいなびかり
横に飛火の野邊の夕立

飯盛筆蹟

宿屋飯盛
石川雅望
江戸の人
（文政十三年歿）



歌よみは下手こそよけれ天地の
動きいだしてたまるものかは

宿屋飯盛

光筆蹟

つむりの光
又つふり光
岸城之
江戸の人
（寛政八年歿）

母の乳父のすねこそ戀しけれ
ひとりでくらふことのならねば

つむりの光

朱樂菅江
山崎景貫
江戸與力
（寛政十年歿）

馬場金埒
大坂屋甚兵衛
江戸の人
（文化四年歿）

眞顔筆蹟

鹿津部眞顔
北川嘉兵衛
江戸の人
（文政十二年歿）

たくはへもみなつきはてて一文も
今日はなごしのはらへだにせず

朱樂菅江

雪ならばいくら酒手をねだられん
花のふゞきの滋賀のやまかご

馬場金埒

あらそはぬ風の柳の枝にこそ
堪忍ぶくろ縫ふべかりけれ

鹿津部眞顔

福本日南
名は誠
新聞記者
（大正十一歿
年六十五）

十二月
元祿十五年
上野介
吉良義央
内藏助
大石良雄

大石良雄

一七　義士最後の神盟

福本日南

月日の過ぎるのは電光の如く、はや十二月となつた。今は上野介が所在をだに確めれば、直ちに討入るばかりである。内藏助はこの月二日を以て、一黨の同志を悉く深川八幡前の一旗亭に召した。亭主への觸込は、「賴母子講の取立に就いて初會を開く」といふのであるから、何人もこれを疑はぬが、其の實は、去年以來金鐵の士と見えた同盟中、江戸到着以來、又又數名の背盟者を出したので、一つには今一回神文の上に血を濺いで、一層同志の精神を鞏め、又一つには軍令を一般に頒つて、討入の約束を定めようがためである。

吉田忠左衛門
名は兼亮

冷光院
淺野長矩

聽て其の軍令は、吉田忠左衛門の手に由つて二樣に起草された。其の一は、一黨討入の綱領ともいふべきもので、「起請文前書」として、人々の名を署し血を濺ぐべき、所謂連判牒の神文の冒頭に記載されたのである。これは最も此の綱領を神聖にし、同志の頭腦に印象させて、一人の違背者をも出すまいとの用意である。其の文は左の通である。

起請文前書之事

一、冷光院樣御尊讎吉良上野介殿可討取志有之侍共申合候處、及此節大臆病者共變心退散仕候者選捨唯今申合必死相極候面面者、御靈魂可被遊御照覽候事。

一、上野介殿御屋敷へ押込働之儀、功之淺深不可有之候。上野介殿印揚候者も、警固一通之者も、可爲同然候。然者、組合働役好事申間敷候。尤も先後之爭不可致候。一味合體如何樣之働

に相當り候共、少しも難澁申間敷事。

一、一味之各〻存寄被レ申出候共、含ミ自己之意趣ヲ申妨候儀有之間敷候。誰にても理の當然に可レ申合ス候。豫而不快之底意有之候共、働之節互に助合ひ、急を見繼ぎ、勝利の全き所を專らに可レ相働ク事。

一、上野介殿十分に討取候共銘々一命可レ遁ル覺悟無レ之上者、一同に申合せ、散々に罷成申間敷候。手負之者於レ有之者、互に引懸け助合ひ、其の場へ集まり可レ申ス事。

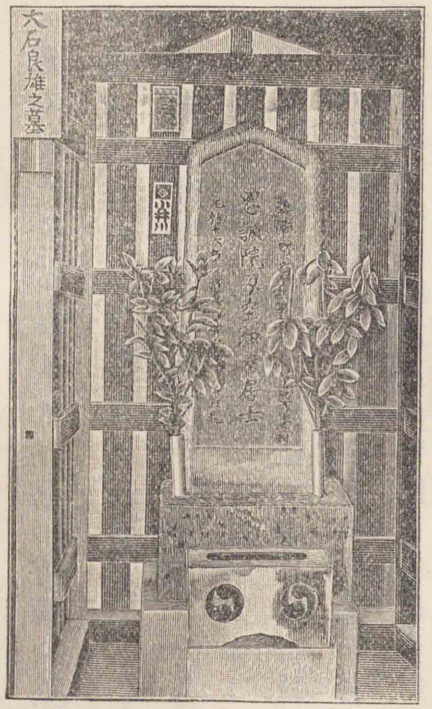
右四個條相背き候はば、一大事成就不レ可レ仕ル候。然者此度退散之大臆病者と可レ爲ル同然事。

原惣右衞門名は元辰

として、其の後に神文は記された。此の案の起草に參與したものは、吉田忠左衞門の外には、原惣右衞門一人であつた。脫稿した案文は內藏助の前に提出された。內藏助はつら〳〵其の案文を看て、「自分の所存も此の外に出でぬ。殘るところもなう物せられた」

泉岳寺內大石良雄の墓

と、莞爾として打喜び、軈て嚴にこれを衆に宣示した。一黨中誰かこれに支吾するものがあらう。內藏助を一卷の筆頭として、我も我もと姓名を其の後に自署し、血判を据ゑて、こゝに最後の神盟は成立した。



大石といひ、吉田・原といひ、流石に兵家は兵家である。義徒の一黨身を捨てて義に赴く精神は、誰彼の區別なく同一で、目ざすは上野介が白髮首である。我こそ我が手に其の首級を揚げ、當場第一の功名を專らにしたいとは、勿論人情の常である。若し此の希望に從つて、人々が個々別々に行動すれば、軍紀も節制もあつたものではない。

それで、三統領は先づこれを慮り、上野介が首級を揚げる者も、警備に一身を委ねる者も、其の功に厚薄のないことを約して、豫め一黨を打つて一團・一體となし、敵を破るも一黨これを破り、讎を獲るも一黨これを獲ることとし、任務の好惡や前後の爭を杜絶したのである。

ひとりこればかりではない、公儀においては同一の意見を有してゐても、私情においては往々相容れぬもののあることは、是亦人情の免れぬ所である。義徒の中にも各種の人士がある。三統領はこれを慮つた。それで、自己の底意を含まず、理の當然に從つて、一に公義に徇ひ、戰友互に相助け、要は全局の勝利を期すべき旨を各人に覺悟させた上、見事目的を達して引揚げる際まで、整々として一致の進退を失はぬやう、同志を約束の裏に收め入れた。

以上は軍令の精神であるが、三統領は尙一黨の志氣・名節を鼓舞

都文公
土屋主税
吉良家の隣家
嵐雪
服部氏
俳人
杉風
杉山氏
俳人

するため、冒頭に、「冷光院様の御靈魂も御照覽遊ばさるべし」といつて、亡君臨終の欝憤を回顧させ、最後に、「この約束に違背する者は背盟・逃脫の大臆病者と同然たるべし」と辱めた。用意の周到、思慮の縝密、唯々感歎の外はない。（元祿快擧錄）

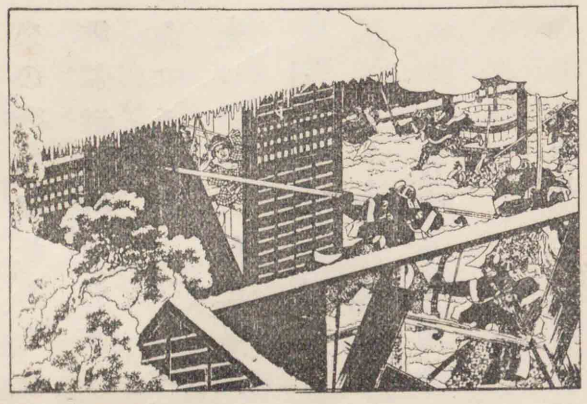
一八　討入の光景

櫻本其角

歳尾の御壽として、例年のごとく、遠路の處酒料一封・鹿鹽漬一桶贈り被下、御厚志の程、幾久しく受納致し候。御序に、御家内始め御社中へも宜しく御傳へ可被下候。然れば去る十四日、本所都文公において年忘の一興御催し有之、嵐雪・杉風・われらも一席にて、折から雪面白く降出し、風情手に取るが如く、庭中の松は雪を戴き、雲間の月は闇を

照らし、風與今は捨て難くして、夜たゞ更けゆくまゝに、はや丑三つのころ、犬さへ吼えず打靜まり、文台・料紙も押片寄せ、四五人集まりて蒲團を被ぎ「夢の憂世」といふ間もあらせず、劇しく門を叩く者兩人、玄關に案内し、「我等は淺野家の浪人堀部安兵衛・大高源吾にて、今夕御隣家吉良上野介屋敷に押寄せ、亡君年來の遺恨を果たさんとて、大石内藏助始め都合四十七人、唯今吉良殿を討取り候處、御隣家の御よしみ、武士のなさけ、萬一御加勢も候はば末代の御不覺と存じ候。　願はくは門戸を嚴しく御防ぎ、火の元御用心下され候はば忝く存じ候」とぞ、いひも果たさず立出づる、その勢の神妙なることといふべくもあらず、今は俳友もこれまでなりとて、「其角こゝにあり、生涯の名殘を見ん」

とて、門前に走り出づれば、各〻吉良家に忍び入り候程に、わが雪と思へばかろし笠の上



と、高らかに一聲よばはり、門戸を閉して内を守り、塀越に提燈ともし始終を伺ふに、そのあはれさ骨身にしみ入り、女人のさけび童子の泣き聲、風颯々と鳴り誘ふ。　曉天に至りては「本懷已に達したり」とて、大石主税・大高源吾、物穏便に謝儀を述べたること、武士の譽といふべきなり。

日の恩やたちまち碎く厚氷

申し捨てたる源吾が精神は、猶眼前に忘れ難し。貴公年來の御入魂故、具さに認め進じ申候　早春の内かれこれ御差繰り御出府候はば、かの落着も承り居け餘儀なく伏紉に及び申し候はば、竊に追善をも相營み可申候。先は餘日も無之、書餘貴面の時を期し候。恐々謹言。

十二月二十日　　其角

文　璘　様

月雪の中や命の捨てどころ

一九　三人の訪問者

島崎藤村

「冬」が訪ねて來た。

私が待ちうけて居たのは、正直にいふと、もつと光澤のない單調な、眠さうな、貧しさうに慄へた、醜く皺枯れた老婆であつた。私は自分の側に來た者の顏をつくづく眺めて、自分の先入主となつた物の考方や、自分の豫想して居たものとは、まるで反對であるのに驚かされた。私は尋ねて見た。

「お前が『冬』か。」

「さういふお前は、一體私を誰だと思ふのだ。そんなにお前は、私を見損つて居たのか」と、「冬」が答へた。

「冬」は私にいろ〳〵な樹木を指して見せた。「あの滿天星を御覽」といはれて見ると、舊い霜葉はもう疾くに落ちつくしてしまつたが、茶色を帶びた細く若い枝の一つ〳〵には、既に新生の芽が見られて、そのみづ〳〵しい光澤のある若枝にも、勢ひ込んで出て來たやうな新芽にも、冬の焰が溢れて來て居た。滿天星ばかりではない、梅の萌蘖（ひこばえ）は濃い綠色に延びて、早や一尺に及ぶもある。ちひさ

くなつて蹲踞んで居るのは躑躅だが、でもいまは慄へるやうな樣子は、すこしも見えない。「あの椿の樹を御覽」と、「冬」が私にいつた。日を受けて光る冬の綠葉には、いふにいはれぬ輝があつて、密集した葉と葉との間からは、大きな蕾が顏を出して居た。何かの深い微笑のやうに咲く、あの椿の花の中には、霜のくる前にはや開落したのさへあつた。

椿（田崎芙山筆）

「冬」は私に八手の樹を指して見せた。そこにはまた白に近い淡綠の色彩の新しさがあつて、その力のある花の形は、周圍の單調を破つて居た。

八手（近藤紫軒筆）

「冬」はそれから毎年のやうに訪ねて來たが、麻布の方で冬籠するやうに成つてからは、一層その訪問者を見直すやうになつた。「冬」で思出す。かつて信濃で逢つた「冬」は、私に取つて一番親しみが深い。毎年五ヶ月の長い間も、私は「冬」の笑顏といふものを見たことがなかつた。十一月の上旬といへば、はや山々へは初雪が來た。そして、暗く寂しい寒空に、日のめを仰ぐことも稀な頃になると、淺間の煙も隱れて見えなかつた。千曲川の流ですら氷に閉ざされた。私の周圍には、降りつもる深い溶けない一面の雪があるばかりであつた。その雪は、私の舊

い住居の庭をも埋めた。どうかすると、北向の縁側よりも庭の雪の方が高かつた。軒にさがる劍のやうな氷柱の長さは、二尺にも三尺にも及んだ。長い寒い夜なぞは、凍み裂ける部屋の柱の音を聞きながら、唯もう穴に隱れる蟲のやうに、ちひさくなつて居た。

この「冬」が、私には先入主となつてしまつた。私はあの山の上で七度も「冬」を迎へた。私の眼に映る「冬」は、唯灰色の物だつた。巴里の方で逢つた「冬」は、それほど雪深いものではなかつたが、でも灰色な色調においては、信濃の山の上に劣らなかつた。私は遠い旅から歸つて、久しぶりで自分の處へ訪ねてきてくれたものの顏を見た時、それが「冬」だとは、どうしても信じられないくらゐに思つた。

遠い旅から歸つて、三度目の「冬」を迎へた年ほど、私は常磐樹の若葉をしみ〴〵とよく見たためしはなかつた。今まで私は黃や紅の霜葉の方に氣をとられて、冬の初に見られる常磐樹の新葉には、

信濃の山路（寺崎廣業筆）

それほどの注意も拂はずに居た。あの初冬の若葉は、一年を通して、樹木の世界に見る最も美はしい物の一つだ。「冬」はその年も槇の綠葉だの、紅い實を垂れた萬兩などを、私に指して見せた。萬兩の實には白もある。あゝいふ濃い珠のやうな光澤は、冬季でなければ見られない。「あの槲の樹を御覽」といつて、「冬」がまた私に指してくれたのを見ると、黑ずんでしつかりとした幹や、細くても强健な姿を失はないあの枝は、まるでゴシック風の建築物に見る感じだ。おまけに冬の日をうけた槲の若葉には、いふにいはれぬ深いかゞやきがあつた。

「冬」は私にいつた。

「お前は、これまでそんなに私を見損つてゐたのか。今年はお前の小さな娘のところへ、土產まで持つて來

た。御覽、あの兒の紅い頰も、この私のこゝろざしだ」と。

「貧」が訪ねて來た。

子供の時分からの馴染のやうな顏付をしたこの訪問者が、またなれ〳〵しく私の側へ來た。正直にいふと、この足繁く訪ねて來る客の顏を見る度に、私は「冬」以上の醜さを感じて居た。「お前とは舊い馴染だ」とでもいひたげなこの客に對したばかりでも、私の頭は下つてしまつた。とても、私には長くこの客を眺めてはゐられなかつた。その私が、自分の側へきたものの顏をよく見てゐるうちに、今まで思ひも寄らなかつたやうな、優しい微笑を見つけ出した。私は以前に「冬」にいつたと同じ調子で、この客に尋ねて見ずには居られなかつた。

「お前が『貧』か」

「さういふお前は、私を誰だと思ふ。そんなに長くお前は、私を知らずに居たのか」と、「貧」が答へた。

「めづらしいことだ。今まで私は、お前の笑顏といふものを見たことがない。お前にそんな笑顏があらうとは、思つて見たことすら無い。私は、お前は笑はないものだとばかり思つて居た。稀にお前に笑はれると、私は身が縮むやうに厭な氣がしたものだ。唯、私はお前に忸れたかして、お前が側に居てくれると、一番安心する」。かう私がいふと、「貧」は笑つて、

「私に忸れてはいけない。もつと私を尊敬してほしい。よく私に清いといふ言葉をつけて『清貧』と私を呼んでくれる人もあるが、本當の私はそんな冷かなものでは無い。私は自分の歩いた足迹に、花を咲かせる事も出來る。私は自分の住居を、宮殿に變へる事も出來る。私は一種の幻術者だ。かう見えても、私は世

に所謂『富』なぞの考へるよりは、もつと遠い夢を見て居る」。

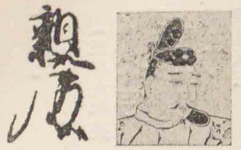
「老」が訪ねて來た。

これこそ私が、「貧」以上に醜く考へて居たものだ。不思議にも「老」までが、私に微笑んで見せた。私は、また「貧」に尋ねて見たと同じ調子で、

「お前が『老』か」といはずには居られなかつた。

私の側へ來たものの顏をよく見ると、今まで私が胸に描いて居たのは眞實の「老」ではなくて、「萎縮」であつたことが判つて來た。自分の側へ來たものは、もつと光つたものだ。もつとあり難味のあるものだ。

しかしこの訪問者が、私の處へ來るやうになつてから、まだ日が淺い。私はもつとよく話して見なければ、本當にこの客の事は判



らない。唯、私には「老」の微笑といふ事が判つて來ただけだ。どうかして、私はこの客をよく知りたい。そして、自分も本當に年を取りたいものだと思つて居る。

まだ誰か訪ねて來たやうな氣がする。それが私の家の戸口に佇んで居るやうな氣がする。私はそれが「死」であることを感知する。おそらく、私が以上の三人の訪問者から、自分の先入主となつた物の考へ方の間違つて居たことを敎へられたやうに、「死」もまた思ひも寄らないことを、私に敎へるかとも思はれる。（藤村全集）

二〇　吉野の行宮

北畠親房

又の年戊寅の春二月、鎭守府大將軍顯家卿、また親王を先だて申し、かさねて打上りぬ。海道の國々を悉く平げて、伊勢・伊賀を經て

北畠氏
吉野朝の忠臣
（正平九年薨年六十三）
又の年
延元三年
親王
義良親王
後醍醐天皇の第八子即ち後村上天皇
陸奥の皇子
義良親王の御事
顯信
顯家の弟

大和に入り、奈良の京になん着きにける。それより處々の合戰、あまたゝび互に勝負ありしに、同じき五月、和泉の國にての戰に、時や至らざりけん、忠孝の道こゝにて極まりにき。苔の下にも埋もれぬものとては、たゞ徒に名をのみぞとゞめし。心憂き世にもありしかな。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて暫く合戰ありしかど、朝敵忍びて社壇を燒拂ひしより、事成らずして引退きぬ。北國にありし義貞も、度々召されしかど上りあへず、させる事なくて、空しくさへなりぬときこえしかば、いふばかりなし。

さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子又東へむかはしめたまふべきさだめあり。左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に敍せられ、陸奥介鎭守府將軍を兼ねしめて遣はされぬ。東國の官軍、悉く彼の節度に從ふべき由を仰せられぬ。親王は儲君に立たせ給ふべき旨、申し聞かせたまひぬ。

内の海
霞浦

七月の末つ方、伊勢に越えさせ給ひて、神宮に事の由を啓して御船の艤ひし、九月の初、纜を解かれしに、十日あまりの事にや、上總の地近くより、空の氣色おどろ〳〵しく、海上荒くなりしかば、又伊豆の崎といふ方に漂はれしに、いとゞ波風夥しくなりて、數多の船行き方知らずなりけるに、皇子の御船は障なく伊勢の海に着かせ給ひぬ。顯信朝臣はもとより御船に候ひけり。同じ風のまぎれに、東を指して、常陸の國なる内の海に來着きたる船ありき。方々に漂ひし中に、この二つの船、同じ風にて東西に吹分けられぬ。末の世には珍らかなる例にぞあるべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居も如何と覺えしに、皇大神のとゞめ申させ給ひけるなるべし。後に吉野に入らせまし〳〵て、御目の前にて天位を嗣がせ給ひしかば、いとゞ思ひあはせられて尊くもありしかな。又常陸はもとより志す方なれば、御志ある輩相計らひて、義兵こは

舊都
京都

くなりぬ。さても舊都には、戊寅の年の冬改元して曆應とぞいひける。吉野の宮にはもとの延元の號なれば、國々も思ひ〳〵の年號なりき。唐土にはかゝる例多けれど、此の國には例なし。されど四年にもなりぬるにや。大日本島根はもとより皇都なり。內侍所・神璽も吉野におはしませば、いづくか都にあらざるべき。

さても八月の十日あまり六日にや、秋霧に冒されさせ給ひて、かくれましましぬとぞきこえし。寢るが內なる夢の世、今に始めぬ習とは知りながら、かず〳〵目の前なる心地して、老の涙も乾きあへねば、筆の跡さへ滯りぬ。むかし仲尼は、獲麟に筆を絕つとあれば、こゝにて止りたくはあれど、神皇正統の邪なるまじき理を申し述べて、素意の末をもあらはさまほしくて、强ひて記しつくるなり。かねて時をも悟らしめたまひけるにや、前の夜より親王をば左大臣の第に移し奉られて、三種の神器を傳へ申されぬ。後の號をば

後醍醐天皇
胎中の天皇
應神天皇

仰のまゝにて後醍醐の天皇と申す。天下を治め給ふこと二十一年、五十二歲おはしましき。

昔、仲哀天皇熊襲を攻めさせたまひし時、行宮にて神さりましましき。されど神功皇后程なく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎭められて、胎中の天皇の御代に定まりき。この君聖運ましましゝかば、百七十餘年中絕えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前にて日嗣を定めさせ給ひぬ。功もなく德もなき盜人世におこりて、四年あまりが程宸襟を惱まし、御世をすぐさせたまひぬれば、

御怨念の末空しくありなんや。今の帝また天照大神よりこの方の正統を受けましく〳〵ぬれば、この御光に爭ひ奉る者やはあるべき。なか〳〵かくて鎭まるべき時の運とぞ覺ゆる。（神皇正統記）

二一　最後の參内

同年
正平二年
將軍
足利尊氏
左兵衛督
足利直義

陣中の楠正行

さても同年兩度の合戰に、京勢むげにうち負けて、畿内多く敵の爲に侵し奪はれ、遠國亦蜂起しぬと告げければ、將軍・左兵衛督の周章、たゞ熱湯にて手を洗ふが如し。今は末々の源氏、國々の催勢などを向けてはかなふべしとも覺えずとて、執事高武藏守師直・越後守師泰兄弟を兩大將にて、四國・中國・東山・東海、二十餘箇國の勢をぞ向けられける。

京勢雲霞の如く淀八幡につきぬときこえければ、楠木帶刀正行・舍弟正時一族打連れて、十二月二十七日吉野の皇居に參じ、四條中納言隆資を以て申しけるは、『父正成、尼弱の身を以て大敵の威を碎き、先朝の宸襟を安め參らせ候ひし後、天下程なく亂れて、逆臣西國より攻上り候間、危きを見て命を致すところ、かねて思ひ定め候ひけるによつて、遂に攝州湊川にして討死仕り候ひ畢んぬ。その時正行十一歳に罷り成り候ひけるを、合戰の場へは伴なはで河内へかへし、『死に殘り候はんずる一族を扶持し、朝敵を滅し、君を御代に卽け參らせよ』と、申しおきて死にて候。然るに正行・

足利尊氏

主上後村上天皇

正時すでに壯年に及び候ひぬ。この度われと手を碎き合戰仕り候はずば、かつは亡父の申しし遺言に違ひ、かつは武略のいひがひなき謗に落つべく覺え候。有待の身、思ふに任せぬ習にて、病に冒され早世仕ること候ひなば、たゞ君の御爲には不忠の臣となり、父の爲には不孝の子となるべきにて候間、この度師直・師泰に驅けあひ、身命をつくし合戰仕つて、彼等が頭を正行が手にかけて取り候ふか、正行・正時が首を彼等に取られ候ふか、その二つの中に戰の雌雄を決すべきにて候へば、今生にて今一度君の龍顏を拜し奉らん爲に、參内仕つて候」と、申しもあへず、涙を鎧の袖にかけて、義心その氣色にあらはれければ、傳奏いまだ奏せざる前に、まづ直衣の袖をぞ濡らされける。

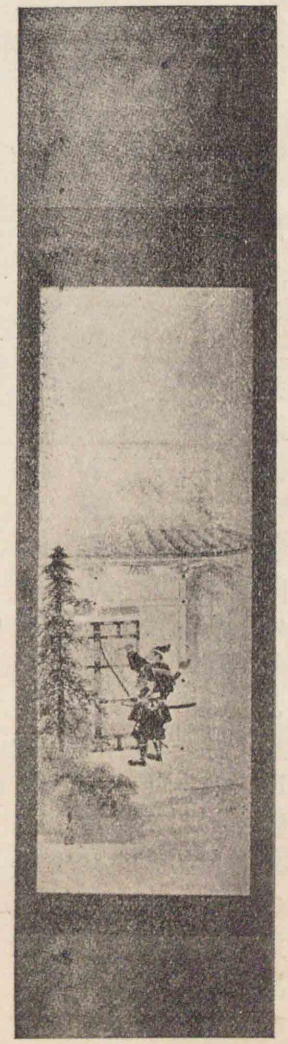
主上乃ち南殿の御簾を高く捲かせて、龍顏殊にうるはしく、諸卒を照臨あつて正行を近く召して、「以前兩度の戰に勝つことを得て、

楠木正行最後の參内の圖

敵軍の氣を屈せしむ。叡慮まづ憤を慰する條、累代の武功返す返すも神妙なり。大敵今勢をつくして向ふなれば、今度の合戰天下の安否たるべし。進退度に當り、變化機に應ずることは、勇士の心とするところなれば、今度の合戰命を下すべきに非ずと雖も、進むべきを知つて進むは、時を失はざらんが爲なり。退くべきを見て退くは、後を全うせんが爲なり。朕、汝を以て股肱とす。愼んで命を全うすべし」と、仰せ出だされければ、正行頭を地につけて、とかくの勅答に及ばず、たゞこれを最後の參内なりと思ひ定めて退出す。

正行・正時・和田新發意・舍弟新兵衞・楠木將監以下、今度の軍に一足も引かず、一所にて討死せんと約束したりける兵百四十三人、先皇

の御廟に參つて、今度の軍難儀ならば討死仕るべき暇を申して、如意輪堂の壁板に、各〻名字を過去帳に書列ねて、その奥に、



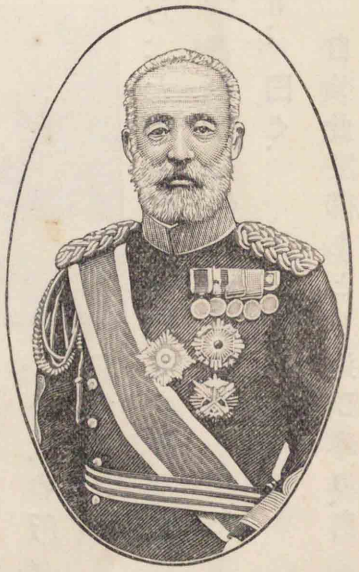
如意輪堂（華邨筆）

かへらじとかねて思へば梓弓
なき數にいる名をぞとゞむる

と、一首の歌を書留め、逆修の爲とおぼしくて、各〻鬢髪を切つて佛殿に投入れ、その日吉野を打出でて、敵陣へとぞむかひける。（太平記）

二二　乃木大將の殉死

徳富蘇峰



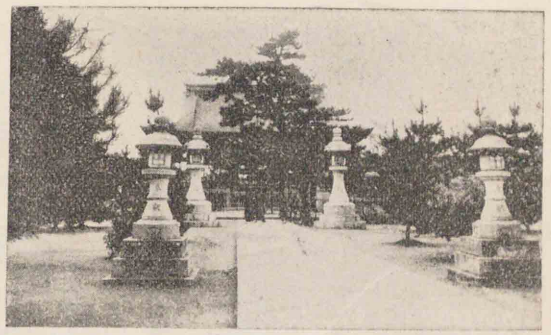
乃木大將夫妻

乃木大將の自殺は深夜の警鐘の如く、青天の霹靂の如く、多大深甚なる印象を天下に與へたり。苟も心ある者は、何人も皆自己に與へられたる一大鐵槌として、これを受用するを禁ずる能はず　然も若し乃木大將自殺の目的これに存すといはば、これ決して大將の本意にあらじ。恩愛は功勞に伴なふ。然も若し恩愛を邀へんが爲に。身を致して君國に奉ずといはば、これ忠臣・義士の心を以て、單

に商賣根性視する者なり。大將の一死を我に善用し、國に善用し、世道人心に善用するは吾人の責任なり。されど後人に教訓せんが爲に、時世を警醒せんが爲に、汚風惰俗に大鐵槌を下さんが爲に、特に自殺したりといふに至りては、これ乃木大將の心事を誣ふるや亦甚し。

吾人の所見によれば、乃木大將の自殺の理由は、その遺言書の第一條においてつくしたり。曰く、

自分此度御あとを追ひ奉り、自



乃木神社（京都府桃山）

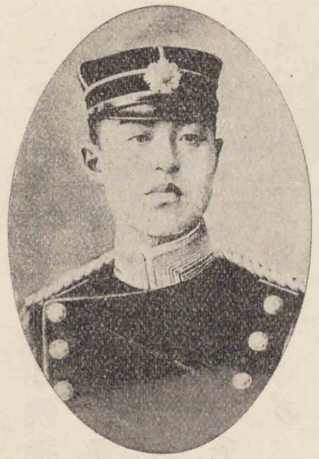
乃木大將遺言狀の一部

殺候處恐入候。その罪不輕存候。然る處明治十年役において軍旗を失ひ、その後死處を得度心掛け候へども、その機を得ず。皇恩の厚に浴し、今日迄過分の御優遇を蒙り、追々老衰、最早御役に立ち候時も無餘日候折柄、この度の御大變、何とも恐入候次第、茲に覺悟相定め候事に候。

と、大將自殺の行逕や、かくの如く明白なり。その心事や、かくの如く光朗なり。あに紛々聚訴の餘地あらんや。

吾人は爰に、乃木大將の事歷を說くの煩を要せず。彼は事ある毎に、その死處を尋ねたるに相違なし。二十七八年役においては、彼は旅團長として出征せり。即ち一部將に過ぎざりき。されど三十七八年役においては、彼は第三軍の將として出征せり。彼の責任や實に重大なりき。彼は二兒と共に家を出で、「三棺並べざれば葬送する勿れ」と家人に戒めたりき。彼もまた人の父なり。

乃木勝典
乃木保典

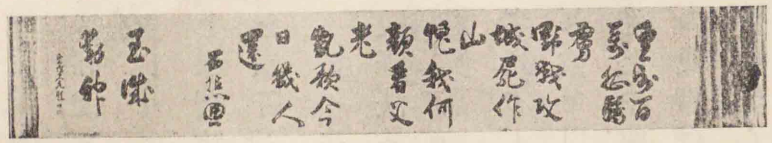


山川草木轉荒涼　十里風腥新戰場
征馬不前人不語　金州城外立斜陽

これ南山役後の作なり。無心にしてこれを讀むもなほ黯然たらざるを得ず。況やこのときにおいて、彼の一子を失ひたる事實を識る者は、彼の胸中の暗涙萬斛なりしを察して、おのづから泣かざらんと欲するも能はざるなり。彼は本來多恨多情の好漢なり。唯武士道の錬磨の爲に剛腸の武夫たりのみ。日本武士道の精華は、感情を發露するにあらずして、これを壓抑するにあり。一首二十八字、字々これ血涙の結晶なり。

旅順攻圍軍は、今古未曾有の慘烈なる經驗を嘗めたりき。中隊・

乃木大將筆蹟



大隊はおろか、殆ど聯隊の全滅さへも繰り返したりき。而して豫期より半歳を超過して、漸く開城を見るに及べり。この役に又他の一兒を失へり。かくの如くして二棺は豫期の如く出來たり。他の一棺は如何。

皇師百萬征驕虜野戰攻城屍作山
愧我何顏看父老凱歌今日幾人還

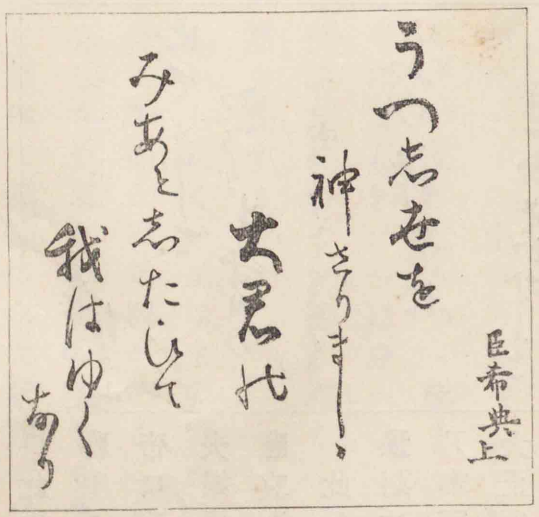
彼は實に「一將功成萬骨枯」の事實を痛切に感じたり。彼の鋭敏なる良心、責任心、廉恥心は、又もや彼を驅りて幾回か自決せしめんと欲したりき。されど彼は餘儀なくその死處を待てり。

三十七八年以後の乃木大將は、殆ど軍服を纏うたる聖僧たりき。然も、獨善は彼の屑しとする所にあらず。彼や、結髮以來尊王愛國の大義を聞き、治國平天下の大道を

學ぶ。彼や、滔々たる世潮に對して、固より沒交渉なる能はざりき。されば及ぶ限はこれを支持し、これを矯正し、彼の所謂躬ら行ふ所を以て、これを他に及ぼさんと欲したりしや明らけし。而して彼を學習院長に擢用し給ひたるは、これ先帝の明鑑にして、眞に適材を適所に措き給ひしものなり。

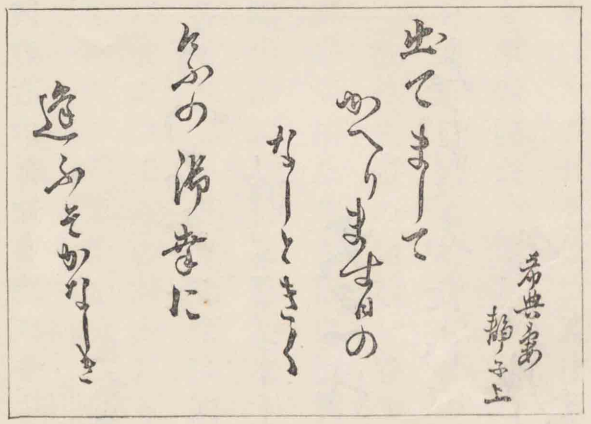
先帝
明治天皇

彼や、先帝の知遇を辱うし、特に三十七八年役以來、彼の孤獨なる家庭、淡枯なる生活、自損利他の行逕、奉公獻身の精誠は深く先帝の鑑奬、嘉諒し給ふ所となり、或は彼を軍職に大用せんとの議を上る者ありしかども、先帝は固く執りて容し給はざりし程なりき。これ彼を以て、人の師表たるべき者と御推信ありしが爲のみ。彼の進路や曲折頓挫、決して和易輕快なりきといふを得ず。しかもその晩節において、聖天子の知遇を辱うす。彼や實に鞠躬盡瘁、老の將に至らんとするを知らざりしが如し。



然るに思ひきや、御發病となり、遂に崩御とならんとは。何人も彼の心中を知る能はず。されど彼やもし祈るべきものなりせば、畏れながら身を以てかはらんと祈りしに相違なからん。彼は最後まで御平癒を信じたりき。而してそれさへ水泡に歸したり。彼がこゝにおいて、一死を以て先帝に殉じたるは、餘人においてはいさ知らず、彼においては極めて自然なり。彼や死處を求めて死處を得たり。單に死處よりすれば、南洲の企て及ぶ所にあらず。名を求むるにあらず、奇を衒ふにあらず。何ぞ況や、他人にあてつくるにおいてをや。

乃木夫人辭世



うつし世を神さりましし大君の
御あと慕ひて我はゆくなり

只此の如きのみ。これ以上の解説や註釋や、これ蛇足のみ。蓋し乃木大將は先帝に殉じ、その夫人は大將に殉ず。彼等夫婦の死は、宛も先帝大喪儀の最も莊嚴悲哀なる誄歌を合奏したるものなり。

此の如くして豫期せられたる三棺は、豫期せられざる機會に四棺となりぬ。乃木家闔門、みな國事・王事に斃る。明治大正の過渡における、血を以て描ける千古不朽の一大悲史は、かくの如くして出できたれり。嗚呼哀しいかな。

梅雨
濕潤
霜晨

二三　早春の賦

阿部次郎

余は、一年の中のあらゆる季節を愛する。光と生命とに溢るゝ夏も、靜に澄わたりつゝ鎭まり行く秋も、溫に雪に籠る冬も、盛なるにつけ、寂しきにつけ、靜かなるにつけ、悲しきにつけ、愁を含むにつけ、快活なるにつけ、漲り溢るゝにつけて、余は一年の中のあらゆる季節を愛する。

しかしかくいふは、余の容易に同化し難き季節と、余と最も調子の合ふ季節との差別があることを、否定する意味ではない。梅雨の美しさや、東京の冬の美しさを感ずるには、余にとつては、身心の特に强健で調節された狀態が必要である。余の心の痛み易く、感じ易き時、葉蔭に熟する梅の實の美しさよりも、灰色の空と肌を襲ふ濕潤の氣の厭はしさとによつて、凛然たる霜晨の勇ましさより

懶惰

も、裸なる土と梢を搖る風の音の烈しさとによつて、余の心は容易にかき亂される。これに反し、一年の中最もよく余の心と調を等しくするのは、春の微に動き始める頃、吹く風に遠山の雪の冷たさを傳へながらも、日の光の肌に親しき頃、ぬくみ始めたる細流のほとりに、青きものの漸く芽ぐむ頃である。

そのとき、自然のいとなみは、なほなかば大地の下に行はれ、中に籠る力はたゆたひつゝ、羞ぢらひつゝ、しかも怠るところなき伸張を續けて行く。

外に發するよりも内に籠ることを愛する余は、懶惰にして急激なる活動に堪へざる余は、しかも内心より燃ゆる力を自覺せずには生き甲斐を感ずることを得ざる余は、一年の中この季節が最も自己の心情に適合することを感ずるのである。かくて余は、晴れたる日はひとり野を行き、岡を行き、春淺き雜木林の下影を行きつ

早春
（伊藤譽浦筆）

コマ
獨樂
笹筍
蕗薹

つ、頬に冷たき風と背にあたゝかき日の光とを貪り味はふ。書を讀みつゝ夢みるものは旅である。雨にこもりて夢みるものもまた旅である。

余は又早春にあたつて、特に幼年の時を回想する。土の下に黑くなつて凍つてゐた雪もいつしか融けて、溫かき日の光を吸ふ大地の面の日毎に擴がり行く時、久しぶりに草履を穿いて外出するよろこびに溢れつゝ、街道を過ぎる雪解の水の小流を跨いで、獨樂を廻すたのしみ、雪の下に芽を出す笹筍の赤い頭や、蕗の薹の青い頭を搜しまはる心のときめき、遠

山の雪を眺めながら、雪解の水の碧く勢よく流れ行く山川のほとりに腰を卸して、何かしら考へこむ少年の頃、思へばこれ等の人生の早春も、自分には既に流れ過ぎてしまつたのである。

やがて桃が咲き、櫻が咲き、霞が流れ、又櫻が散る。さうして自然は又、余の特愛する第二の季節に――この度は木々の梢の上にあつて、自然の力が再びこもりつゝ、羞ぢらひつゝ、すく〳〵と伸び行く晩春初夏の節に――入るのである。（北郊雜記）

和辻哲郎
哲學者
京都帝國大學
助教授

二四　樹の根

和辻哲郎

一

松の樹に圍まれた家の中に住んでゐながら、松の樹の根が地中でどうなつてゐるかは、餘り考へて見たことがなかつた。美しい赤褐色の幹や、わりに色の淺い清らかな綠の葉が、永い馴染である松の樹の全體であるやうな氣持がしてゐた。雨がふると、幹の色はしつとりと落ちついた、うるほひのある鮮かさを見せる。綠の葉は涙に濡れたやうなしをらしい色艶を增して來る。雨のあとで太陽が輝き出すと、早朝のやうな爽かな氣分が、樹の色や光の內に漂うて、いかにも朗かな生のよろこびが、そこに躍つてゐるやうに感ぜられる。折節かはいゝ小鳥の群が、活き〳〵した聲で囀りかはして、綠の葉の間を樂しさうに往き來する。――それが私の親しい松の樹であつた。

しかるに、或時私は、松の樹の生ひ育つた小高い砂山を崩してゐる處にたゝずんで、砂の中に喰込んだ複雜な根を見ることが出來た。地上と地下との姿が、何とひどく相違してゐることだらう。一本の幹と、簡素に並んだ枝と、樂しさうに葉先を揃へた針葉と、――それに比べて地下の根は、戰ひ、もがき、苦しみ、精一杯の努力をつ

くしたやうに、枝から枝とわかれて、亂れた女の髪の如く、地上の枝幹の總量よりも多いと思はれる太い根、細い根の無數を以て、一齊に大地に抱きついてゐる。私は、このやうな根が地下にあることを知つてはゐた。しかしそれを、目の前にまざ〳〵と見たときには、思はず驚異の情に打たれぬわけには行かなかつた。私は、ながい馴染の間に、この樣な地下のくるしみが、不斷に彼等にあることを、一度も自分の心臓で感じたことがなかつたのである。彼のくるしみの聲を聞いたのは、時折に吹く烈風の際であつた。彼のくるしさうな顔を見たのは、しめりのない炎熱の日が、一月以上も續いた後であつた。しかしその叫び聲や、萎れた顔も、その時さへ過ぎれば、すぐにもとの快活に歸つて、くるしみの痕をめつたにあとへ殘さない。しかも彼等は、我々の眼に祕められた地下の營を、一日も怠つたことがないのであつた。あの美しい幹も葉も、五月の

風に吹かれて飛ぶ綠の花粉も、實はこのやうな苦勞の上にのみ可能なのであつた。

この時以來、私は松の樹のみならず、あらゆる植物に心からしたしみを感ずるやうになつた。彼等は、我々と共に生きてゐるのである。それは誰でも知つてゐる事だが、私には新しい事實としか思へなかつた。

二

私は高野山へ登つた。さうして不動坂にさしかゝつた時に、數知れず立並んでゐるあの太い檜の木から、何とも云へぬ莊嚴な心持を押しつけられた。なるほどこれは靈山だと思はずにはゐられなかつた。この地を選んだ弘法大師の見識にも、つく〴〵敬服するやうな氣持になつた。

それは、外廓に連なる山々によつて、平野から切離された、急峻な

弘法大師
空海
眞言宗の開祖
（承和二年寂）

山の斜面である。幾世紀を經て來たかわからない老樹たちは、金剛不壞といふ言葉に似つかはしいほどな、どつしりとした、迷のない、壯大な力强さを以て、天を目指して直立してゐる。さうして樹の間に漂うてゐる生々の氣は、ひた〳〵と人間の肌にも迫つて來る。私は底力のある興奮を、心の奥底に感じ始めた。

私の眼は、すぐに老樹の根にむかつた。地下の烈しい營は、既に地上一尺のところに明かに現れてゐる。土の層の深くないらしいこの山に育つて、あの亭々たる巨幹を支へるために、太い强靱な根は、力の限四方へひろがつて、地下の岩にしつかりと抱きついてゐるらしい。あの巨大な樹身にふさはしい根は、一體どんなであらう。殊に相隣つた樹の根と入りまじつて、薄い地の層の間に複雜にからみ合つてゐる有樣は、想像するだけで我々に驚異の情をおこさせる。たしかに山ははげしい生の力の營によつて、殘る所

なく包まれてゐるのである。我々は、それを肉眼によつて見る事は出來なかつたが、しかし一種の靈氣として感ずることは出來た。隱れた努力の威壓が、神祕の影をさへ帶びて、我々に敬虔の情をおこさせずにはゐなかつたのである。

私は老樹の前に、根の淺い自分を恥ぢた。さうして地下の營に沒頭することを、自分に誓つた。今氣づいてもまだ遲くない。

三

成長を欲するものは、まづ根をたしかにおろさなくてはならぬ。上に伸びる事をのみ欲するな。まづ下に喰入ることを努めよ。

四

早年にして成長のとまる人がある。根をおろそかにしたからである。

四十に近づいて急に美しい花を開き、豐かな果實を結ぶ人があ

る。下に喰入る事に沒頭してゐたからである。

私の知人にも理解のいゝ頭と、感激の強い心臓と、よく立つ筆とを持ちながら、まるで勞作を發表しようとしない人がある。彼は、今生きることの苦しさに壓倒されて、自分のやうなものは生きる直打もないとさへ思つてゐる。しかし、それは彼の根が一つの地殼に突當つて、それを突破する勞力に惱んでゐるからである。やがてその突破が實現された時に、どのやうな飛躍が彼の上におこるか。――私は彼の前途を信じてゐる。根のたしかな人から、貧弱な果實が生まれる筈はない。

五

古來の偉人には、雄大な根の營があつた。その故に彼等の仕事は、味はへば味はふほど深い味を示してくる。

現代には、たとへ根に對する注意が缺けてゐないにしても、ともすればそれが、小さい植木鉢のなかの仕事に墮してゐはしないか。いかにすれば珍しい變種が出來るだらうかとか、いかにすれば豫定の時日の間に注文通の果實を結ぶだらうかとか、すべてがあまりに人工的である。限られた土壤の中で纖細に發達した根は、深い大地に移されても、自由にその手足を伸ばすことが出來ない。天を衝かうとするやうな大きな願望は、いぢけた根からは生まれる筈がない。

偉大なものに對する崇敬は、また偉大な根に對する崇敬であることを考へて見なければならぬ。

六

根のためには、出來るならば地の質を選ばなくてはならぬ。果實のためには、出來るならば地に培ふ肥料を選ばなくてはならぬ。根に對する情熱を鼓吹し、その根の本能的に好むところの土壤

のありかを教へ、さうして幾千年來堆積してゐる滋養分を、その根に供給してやるのが、教育の任務である。

教養は培養である。それが有効であるためには、まづ生活の大地に喰入らうとする根がなくてはならぬ。

人々は、あまりに根の本能を忘れてゐはしないか。いかに貴い肥料が加へられても、それを吸收する力のない所では、何の役にも立たない。私は教養の機會と材料とが、我々の前に乏しいとは思はない。たゞそれに相當する根が小さいのを恐れる。

汝の根に注意を集めよ。（偶像再興）

二五　扇の的

さる程に阿波・讃岐に平家を背いて源氏を待ちける兵ども、あそこの峯、こゝの洞より十四五騎、二十騎打連れ〳〵馳來るほどに、判官程なく三百騎になりたまひぬ。「今日は日暮れぬ、勝負を決すべからず」とて、源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小船一艘、汀へむかつて漕寄せ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横ざまになす。「あれは如何に」と見るところに、船の中より年の齢十八九許なる女房の、柳の五衣に紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出だしたるを、船のせがいに挾みたて、陸へ向いてぞ招きける。

判官、後藤兵衞實基を召して、「あれは如何に」とのたまへば、「射よとにこそ候ふらめ。たゞし大將軍の矢面に進んで御覽ぜられん所を、手だれに狙うて射おとせとの謀とこそ存じ候へ。さりながら扇をば射させらるべうもや候ふらん」と申しければ、判官「身方に射つべき仁は誰かある」と問ひたまへば、「手だれども多う候ふなかに、下野國の住人那須太郎資高が子に與一宗高こそ、小兵では候へども、手はきいて候」と申す。判官「證據があるか」。「さん候。かけ鳥な

さる程に安德天皇壽永四年二月十八日

判官　檢非違使尉源義經

どを爭うて、「三つに二つは必ず射おとし候」と申しければ、判官、「さらば與一呼べ」とて召されけり。

與一、その頃はまだ二十ばかりの男なり。かちに赤地の錦を以て、おほくび・はたそで、いろへたる直垂に、萌黄縅の鎧着て、足白の太刀を佩き、二十四差いたる切斑の矢負ひ、薄切斑に鷹の羽割合はせてはいだりける、ぬための鏑をぞ差添へたる。滋籐の弓、脇に挾み、甲をば脱いで高紐にかけ、判官の御前に畏まる。

判官「いかに與一、あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし」と宣へば、與一「仕つとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方の御弓矢の疵にて候ふべし。一定仕らうずる仁におほせつけらるべうもや候ふらん」と申しければ、判官大いに怒つて、「今度鎌倉を立つて西國へむかはんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、これより疾う〳〵鎌

扇の的（古版平家物語挿絵）

倉へ歸らるべし」とぞ宣ひける。

與一、重ねて辭せば惡しかりなんとや思ひけん、「さ候はゞ外れんをば存じ候はず、御諚にて候へば仕つてこそ見候はめ」とて御前を罷りたち、黑き馬の太く逞しきにまろほやすつたる金覆輪の鞍置いて乘つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。身方の兵ども、與一

が後を遙に見送つて、「この若者、一定仕らうずると覺え候」と申しければ、判官も頼もしげにぞ見たまひける。矢頃少し遠かりければ、海の中一段ばかり打入りたりけれども、猶扇のあはひは七段ばかりもあるらんとこそ見えたりけれ。

頃は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折節北風烈しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟は搖りあげ搖りする〻漂へば、扇も串に定まらず、ひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつばみを並べてこれを見る。いづれもいづれも、晴ならずといふことなし。

與一目を塞いで、「南無八幡大菩薩、別してはわが國の神明、日光權現、宇都宮、那須湯泉大明神、願はくはあの扇の眞中射させたまへ。これを射損ずるものならば、弓切折り自害して、人に再び面を向くべからず。今一度本國へ歸さんと思召さば、この矢はづさせたまふな」と、心の中に祈念して、目を見開いたれば、風も少し吹弱つて、扇も射よげにこそなりたりけれ。

與一鏑を取つて番ひ、よつ引いてひようと放つ。小兵といふ條、十二束三つぶせ、弓は強し、鏑は浦響く程に長なりして、過たず扇の要際一寸ばかり置いて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一揉二揉揉まれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日の輝くに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬ搖られけるを、沖には平家舷を敲いて感じたり、陸には源氏箙を敲いてどよめきけり。（平家物語）

二六　高き希望

山路愛山

爾の希望を高くせよ。流は源に水平す。爾が高き希望は、爾が未來の成就を約束するものなり。

山路愛山
名は彌吉
評論家
（大正六年歿
年五十四）

バルファー
英國の哲學者

古代の小説に曰く、「或王ありて一子を生めり。十二の僧はきたりて、各一個の祝福を王子に與へたり。或者は『智惠あれ』と祝し、或者は『美しかれ』と祝し、或者は『力あれ』と祝せり。最後の僧は『王子よ、不滿足なれ』と祝しぬ。王は、その言の呪詛に似たるを怒りて、これを放逐せり。何ぞ知らん、王子成長の後すべての事に滿足したれば、力もなく熱心もなく希望もなき者とならんとは」と。バルファー曰く、「吾人は未だその欲する所を得ずして願望を抱ける間は、吾人はなほ搖籃の中に在るなり」と。これ成長すべき希望あるをいふなり。また曰く、「既にその願望に疲れて眠らんとする時は、これ既に垂死の床に在るなり」と。人の常に青春の氣力を保つ所以は、目前に一箇の理想を置きて、こ

聖母
（ラファエル筆）

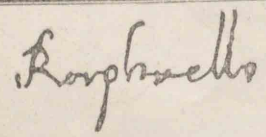
ラファエル
伊太利の大畫家

コルレジオ
伊太利の畫家

ラファエル

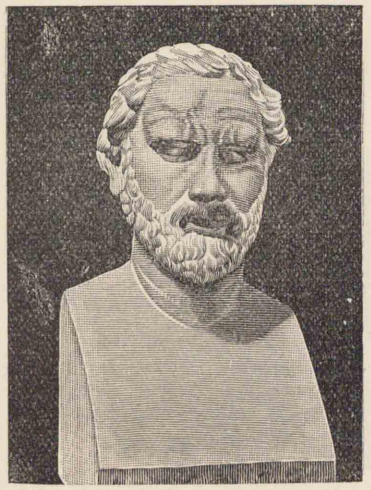
カリストラタス
希臘の雄辯家

デモステネス
希臘の大雄辯家



れに向つて前進しつゝあればなり。理想なきは死なり。滿足は腐敗なり。爾の生活をして、平板にして倦み易き行路たらしむること勿れ。人生をして、單調なる散文たらしむること勿れ。高尚なる希望をして、爾の行爲を熱せしめよ。安逸を貪らず、艱難を歡迎せしめよ。爾の情をして、爾の手の爲す所を鼓舞せしめよ。ラファエルの妙作を見たるコルレジオはいひき、「余も亦畫工にあらずや」と。而して彼は終に傳世の畫工となれり。カリストラタスの雄辯を聽きたるデモステネスは、自己の聲音の極めて低くし

聖誕（コルレジオ筆）



ヘラクリトス
希臘の哲學者

ヘラクリトス

て明瞭ならざるにも關らず、雄辯家たらんと決心せり。而して彼は、世界が忘るゝ能はざる大雄辯家となれり。ヘラクリトスいはく、「些細の事務に心を勞し、事物の理を推論する等の事は、往々人をして精力を消耗せしむ。唯吾人を刺激して上にむかはしむるものは、純潔なる理想のみ」と。英雄は理想を實現せんことに、心を熱したる者なり。

浮世の慾望は、人をして何事かを爲さしめずんば息まずといへども、これを高尚なる希望の、人の品位を

曲亭馬琴
名は解
江戸小説家の
巨擘
（嘉永元年歿
年八十二）

蒲生君平

して天の高きに達せしむるに比すれば、その間霄壤の差なきにあらずといふべし。（愛山文集）

二七　三奇士

一　君平と蘆庵

瀧澤馬琴

蒲生君平、山陵探求の爲に京に赴き、小澤蘆庵の許に杖を留めて、日毎に陵を尋ねめぐれり。その間蘆庵はいつもみづから風呂を焚きて入浴せさす。君平その心づかひを心苦しとて辭みたれど、「これらの事は、ひたすらに客を愛するのみならず、足下の如き國の爲に力をつくす人の疲勞を、聊かなりともうち慰めんの

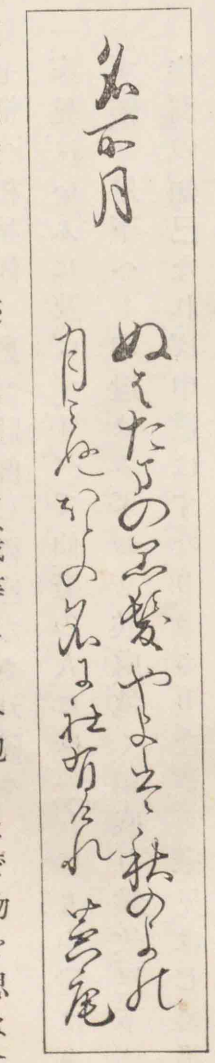
小澤蘆庵

心のみ。必ず辭み給ふな」とて聞き入れず。

かゝりし程に、君平は或夜、更闌けて子二つの頃歸れるに、蘆庵はいまだいねず。例の如く入浴せさせ飯をすゝめ、さていふやう、「われ足下を宿せる日より、蔬菜の外に物もなく、させるもてなしをばせざれども、老僕を慰はせんとて、手づから風呂をさへ焚くを思ひ斟み給はずや。陵を尋ねめぐればとて、今までは用なからんに、道草食うてか。老人に物を思はせ給ふこと心得がたし」と呟く。

君平聞きて容を改め、「翁のうらみ理なり。わが非を飾るにあらねども、こよひかく更闌けたるは、いさゝか故あり。懺悔のため笑に供へん。今日は某の天皇の陵を尋ねけるに、日暮るゝまで尋ねもあはで、思はずも等持院な

る尊氏の墓を見たり。こゝに至りて、年頃のうらみ心頭におこりて堪へられず、墓にむかひて罵りけるは、『梟臣尊氏、靈あらば今いふ事をたしかに聞け。汝が一旦治まりたる建武中興の世をみだして、逆に取り逆に守り、毒を後世に流してより二百十數年、干戈をさまらず、國の舊典もために燒け失せ、王室もこれによりて衰へ、歴代



帝王の山陵すらも迹なくなりて、我等にさへ飽くまで物を思はするは、皆これ汝が罪なり。天罰思ひ知るべし』と、口にまかせてのゝしりぬ。かくて寺門を出づるほどに、物ほしうなりければ、道のほとりの酒屋に立ちより、怒にまかせて飲むほどに、六七合をつくしたり。さて酒屋をば出でたれど、醉ひて足もさだまらず。このま

まにて歸らば必ず翁に叱られん、なかば醒まして行かんと、株に尻を掛けたるが、うまいやしけん、驚き覺むれば早更闌けたり」と語るに、蘆庵も腹を抱へけりとぞ。（兎園小說）

二　獄中より

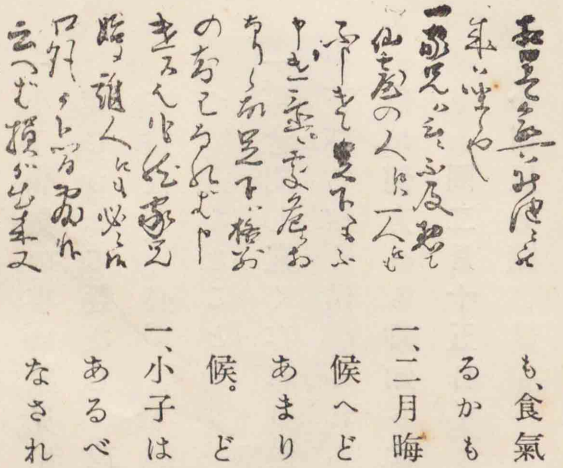
林子平

只七様へ相呈候。愈〻御壯健に御座なされ候や。

一、家兄はいふに及ばず、すべて仙臺の人には一人にも申遣はさず候。足下へも申遣はさずおき候處、危く相成り候故、足下は格別の知己なれば申遣はすなり。さりながら家兄はじめ誰人にも、必ず〳〵御口外下さるまじく候。いへば損が出來、また騷動も出來るがいやなり。必ず〳〵只一人祕してさしおかれ、小子が死んだ沙汰があらば、その時御賴の一卷を御屆下さるべく候。小子が死なざる以前は、足下の箱中に御預りおき下さるべく候。

子平

名は友直（寛政五年歿年五十六）
只七
小川氏
諱は道隆
號は萬笑
仙臺の人
家兄
林嘉善



一、小子は不幸にして二月六日の頃より、隱症傷寒にて危き目に逢申候。大邪は除き候へども、食氣一圓なし。甚だ疲れ申候。命數盡くるかも計り難く存候。

一、二月晦日閏二月八日兩度呼出しもこれありあまり殘念さに、十二日に別紙の如く相達申候へども、病氣故罷出でず、殘念山の如くなり。候。どうなる事やら相知れず候。

一、小子は病死になるか刑死になるかにてこれあるべく候。どの道にも、小子が死を御聞きなされ候はば、この書狀三人の猶子どもの內へ御屆下さるべく候。生き候はば御引裂下さるべく候。外の用ではなし、死期の言葉を、

若年どもに遺すにて御座候。世の中はをかしなものに御座候。小子が遺言あるとは不似合の様に御座候。

一、小子病氣の事は、家兄始め仙臺の人には一向に申遣はさず候。案じさせて益なし。珍平をのぼせるなどとて、錢をつかはせて益なし。必ず〳〵御沙汰御無用になし下さるべく候。至つて益なきことなり。死んだ時いひ出して濟むことなり。

一、再會期し難く存奉り候。御閨中樣・衞盛子宜しく仰達せられ下さるべく候。くれ〴〵も、世間で小子が死んだ沙汰のない內は、何方へも御知らせ下さるまじく候。草々頓首。

閏二月十五日

小川只七樣

珍平
林嘉善の子

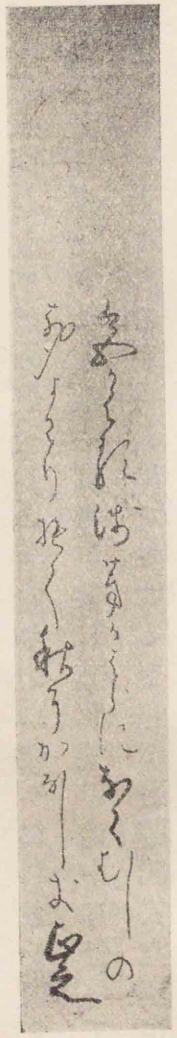
二月十五日
寛政四年

菅茶山
名は晉卿
儒者
（文政十年歿
年八十）

三　節季の山越

菅　茶　山

彥九郎は上野新田の人なり。余はたち許の時、きたりて一宿せることあり。人となり鼻高く、目深く、口廣く、丈高く、總髮にして、中古より王道の衰へしを歎きて、時としては流涕す。歷代天子の御諱・山陵まで諳記して一つも誤らず。亂世には武者修業といふものありけれども、今は治平の世なれば、德義・學業の人を尋ねありくも、少年の稽古なりとおもひて、六十餘國を遊觀せんと志し、一冬、袷



高山彥九郎
筆蹟

一枚を着け、露宿して試みしに、風をもひかざりしによりて、出遊をはじめしなりともいふ。

この人播磨に赴き、姫路の北郊に相識の人ありて一宿す。翌日晩際にいとまを乞ひて出立たんとするを、主人とゞめて、「時は節季なり、日は暮れかゝれば明朝立たれよ」といへども、「但馬にゆき、年內

に京へ出でて、内侍所の御神樂を聞くに日數かぎりあれば」とて、强ひて出立ちぬ。

その翌春、かの姫路北郊の百姓に、罪ありて獄に入れるものあり。赦され歸りて、獄中のことどもかたれる中に、「山賊とおなじ獄に在りて、『そこら、多年山賊をなして深山に夜をあかし、恐しきものに逢ひしか』と問ひしに、賊のいへるは、『十餘年山に棲みたれど、一夜も恐しき者を見ず。　されど唯一度、去年某月某夜、某の山中に佇みて人を待ちしに、大きなる男一人出できたるを見て、吾等四人立塞がりて酒錢を乞ひしに、その人大音にて、「慮外者め」と叱りて、傍に人なきが如く、いう〳〵と過行きしかば、四人は各、尻もちつきて、暫くはものもえいはざりき。　その聲の大きさ、山に響きてすさまじく、やゝありて、その人を見れば、半町ばかりも行過ぎて、後を見かへりし眼ひかりて、恐しきことかぎりなかりき。　これこそ天狗などいふものにてもありつらめ』といひし、その賊の顏もおそろしげなりき」と。この事を彼の主人聞きて、月日を敎へ、その時刻と、その地とを考ふるに、その人は必ず彦九郎ならん。　かの山中を、節季の夜半に一人すぐる人、外にはよもあらじと舌を卷きしよし。

彦九郎、年を經て薩摩に遊びてのかへるさ、久留米の某が家に宿りて腹切りて死にけり。　その故を知らず。（筆のすさび）

二八　國史に返れ

德富蘇峰

「國史に返れ」。　日本國の歷史は大和民族の系圖である。　吾人祖先の功科表である、日本帝國の寶庫である、日本國民の經典である。日本國を知るには、歷史を透して知るより他に方法がない。　國史は實に忠實なる案內者である、信賴すべき指導者である。

吾人は歷史的に考慮せねばならぬ。　すべての人類は平等觀よ

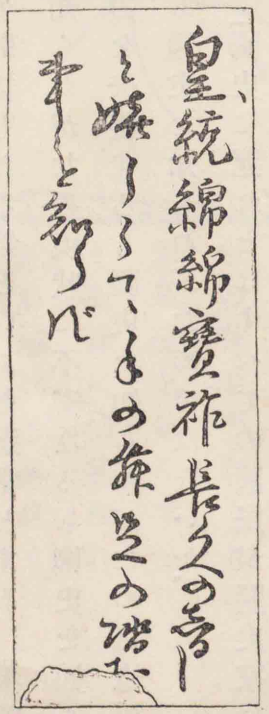
りすれば皆同胞である。されど歴史觀よりすれば、すべての國は皆特殊な性格を具へてゐる。甲國と乙國とは同じでなく、乙國と丙國とは違ひ、而して丙國と甲國も亦同じでない。十箇國あれば十箇國の相違があり、百國あれば百國の差違がある。この特殊な國性を維持する上において、始めて獨立國の意義が完くされる。獨立國の本義は形式的に他の干渉を絶ち、我が自主の體面を保つのみではない。精神的に自主でなければならぬ。詳にいへば、精神的に自國の國性を把持し保存し開展し發達させねばならぬ。

我が大和民族の誇は、日本の歴史である。この歴史の中には、必ずしも悉く皆正しい事善い事のみが滿ちてはゐない、必ずしも悉く敬ふべく仰ぐべき事のみが溢れてはゐない。人間は決して神様ではない。人間の所作には、様々の過失もあれば罪惡もある。されど總括していへば、日本の歴史は大和民族の恥辱史ではなく、

高山彦九郎筆

光榮史である。

いかに日本の皇室が、世界に比類なきあり難い皇室であるかは、國史が最も雄辯にこれを語つてゐる。いかに日本の國民が、その一旦緩急の際に處して、護國の精神の猛烈にかつ勇敢であつたかは、國史がその證人である。いかに大和民族の中に、世界的偉人と比較して一歩も劣らぬ者、即ち彼自身また世界的偉人と稱するに足る者を生じたるかは、長き年代の中に屢〻接觸する所である。即ちわが明治天皇の盛德・大業も、國史の背景によりて始めて明白に精詳に剴切に、これを會得する事が出來る。即ち五箇條の御誓文の如きも、國史の背景なきに於ては、只一



種の雄快なる文書たるにとゞまる。帝國憲法の如きも、國史の背景なきに於ては、單に乾燥無味なる一部の法文にとゞまる。

およそ固陋・頑冥の守舊思想や、保守・退嬰の島國根性や、もしくは詭激・狂妄の赤化主義や、架空・浮誇の模倣精神や、いづれも我が國史を閑却したる爲といふを適當とする。現狀を株守するも國史を知らぬがため、現狀に不安なるも國史を知らぬがため、國民的自信力を失墜するも國史を知らぬがため、自惚根性にて醉生夢死するも國史を知らぬがためではないか。

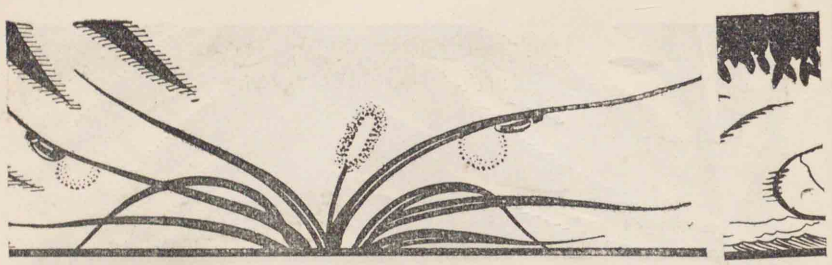
「國史に返れ」とは、すべての國民が歴史家になれといふのではない。只日本國民として、日本の歴史のその大なる筋道を諒解せよといふのである。この歴史は、精神的に於ける日本の潛在せる寶藏である。苟も國民的に生活しかつ活動せんとせば、まづこの寶藏にむかつてすべての物を求むべきである。（國民小訓）

二九　力

幸田露伴

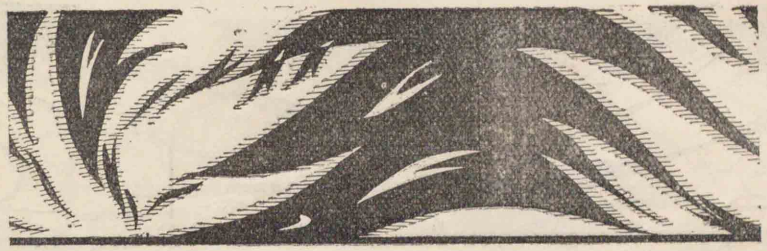
天に聳ゆる千尺の巖二つに劈きて、
山もとゞろにたぎり落つる、
水の強さの頼もしや。
雲絶壁を蝕んで、
老樹靜に枯藤垂れ、
亂石堰切る溪狹く、
山靈水の去るを惜めど、
「われ大海に到るべきなり。
われ大海にゆかんとぞ思ふ。
われ力あり。われ進む。

磧礫はわれ推し流してん。
磐石はわれ躍り超えてん。
われ力あり。われ休まじ。
遮る岩は岩潰やしてん。
止むる岸は岸崩してん。
われ戰を厭はざるなり。
我が吶喊し怒號する
聲は常磐に衰へじ。
見よ大海に到らでは
必ず已まじ休まじ」と、
獅子と狂うて雷と鳴る
瀧川の水、瀧川の水、

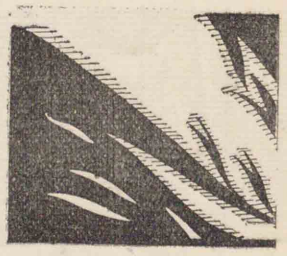


水の力のたのもしや。
水暗き野澤に生ふる蒲の葉の、
裏這ふ螢なほ嫩し。
それより弱く微かなる、
光小さき一點の
火の有つ力凄じや。
はじめ熒々力なけれど、
やがて灼々明るさを增し、
炎々として誇り出せば、
いつかみづから風をさへ呼び、
烈々として怒り盛れば、

阿房の宮殿
秦の始皇の建てた宮殿

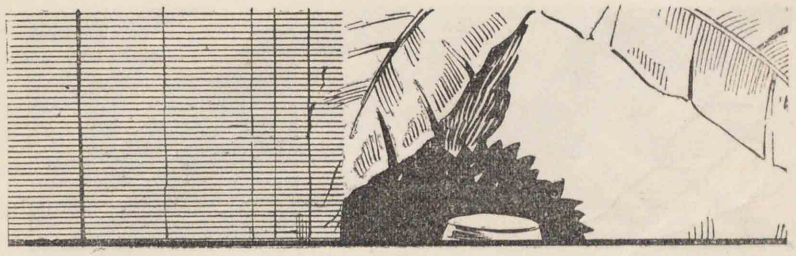


終に激して雨にさへ勝つ。
火の有つカ凄じや。
蹙そびゆる花の雲、
黄金の蛍尾日に逼る、
阿房の宮殿たちまちに、
赤龍蜿蜒る最大梁、
紅蓮燻く圓柱、
扇椽に風煽る、
眞黒煙まづ立つて、
萬點の星迸り飛び、
魔君呼號す聲の文、
焼け落つる音爆裂る音、



たゞおそろしき一團の、
火炎の山と燃えたちて、
百里を照らす火の光、
幾日空に大空を焼く。
火のもつカ凄じや。

日は暖に蝶倦んで、
靜に垂るゝ繡簾の
内に人無く沈かをる、
富家の庭の初夏の午、
玉巻く芭蕉忽として、
輾りひらけて枝蛙鶯く。



生絹日に透く碧一帳、
鸞羽風あり揺ぐ翠光。
忽ち開く玉巻く芭蕉
草には草の力あるかな。
自己を支ふる物の力。
他を動かす物の力。
力交はり萬象をなす。
力無ければ世は空虚なり。
動いて休まぬ心臓の力に、
六尺の身は熱き血を盛り、
進んで飽かぬ精神ありてぞ、
人世五十夢ならぬなる。

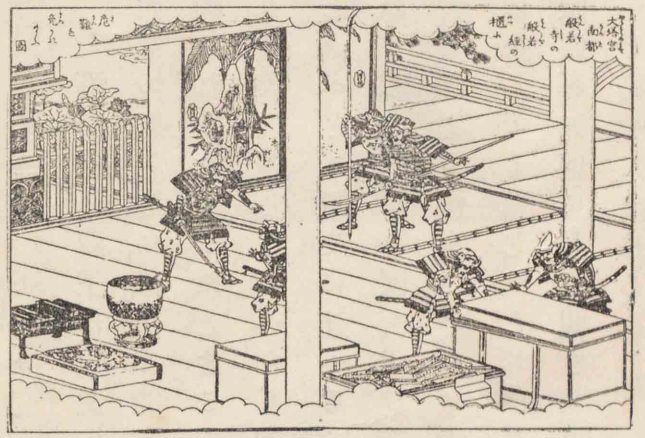
大塔宮護良親王

三〇 熊野落

大塔宮二品親王は、笠置の城の安否を聞召されん爲に、しばらく南都の般若寺に忍びて御座ありけるが、笠置の城已に落ちて、主上囚はれさせ給ひぬときこえしかば、虎の尾を履む恐、御身の上に迫りて、天地廣しといへども御身を隠さるべき所なく、日月明かなりといへども長夜に迷へるこゝちして、晝は野原の草に隠れて、露に臥す鶉の牀に御涙を爭ひ、夜は孤村の辻に佇みて、人を咎むる里の犬に御心を悩まされ、いづくとても御心安かるべき所なかりければ、かくても暫しはとおぼしめされける所に、一乘院の候人按察法眼好專、如何にして聞きたりけん、五百餘騎を率ゐて、未明に般若寺へぞ寄せたりける。

折節宮につき奉りたる人一人もなかりければ、一ふせぎ防ぎて

落ちさせたまふべき樣もなかりける上、透間もなく兵己に寺内に打入りたれば、紛れて御出あるべきかたもなし。さらばよし、自害せんとおぼしめして、既におしはだ脫がせたまひけるが、事叶はざらん期に臨んで腹を切らん事は、いと易かるべし。若しやと、隱れて見ばやとおぼしめしかへして、佛殿の方を御覽ずるに、人の讀みかけて置きたる大般若の唐櫃三つあり。二つの櫃はいまだ蓋をあけず、一つの櫃は御經を半ばすぎ取出して、蓋をもせざりけり。この蓋を明けたる櫃の中へ御身を縮めて伏させたまひ、その上に御經をひきかづき



般若寺の大塔宮（太平記圖會）

大般若佛經（六百卷）

て、隱形の呪を御心の中に唱へてぞおはしける。若し搜し出されなば、やがて突立てんと思召して、氷の如くなる刀を拔いて御腹にさし當て、兵「こゝにこそ」といはんずる一言を待たせ給ひける御心の中、おし量るも尙淺かるべし。

さる程に、兵、佛殿に亂れ入りて、佛壇の下、天井の上までも殘る處なく搜しけるが、餘りに求めかねて、「これ體の物こそ怪しけれ。あの大般若の櫃をあけて見よ」とて、蓋したる櫃二つを開けて御經を取出し、底を翻して見けれどもおはせず。「蓋開きたる櫃は見るまでもなし」とて、兵皆寺中を出でさりぬ。宮は不思議の御命を續がせ給ひ、夢に道行くこゝちして、猶櫃の中におはしけるが、もしまた兵立歸り、委しく搜す事もやあらんと御思案ありて、やがて前に兵の搜し見たりつる櫃に、入りかはらせたまひてぞおはしける。

案の如く、兵どもまた佛殿に立歸り、前の蓋の開きたるを見ざり

玄奘三藏
唐代の名僧
大般若經の飜譯者

つるが覺束なし」とて、御經を皆打移して見けるが、から〳〵と打笑うて、「大般若の櫃の中をよく〳〵搜したれば、大塔宮はいらせ給はで、大唐の玄奘三藏こそおはしけれ」と戲れければ、兵皆一同に笑ひて門外へぞ出でにける。　これ偏に摩利支天の冥應、又は十六善神の擁護による命なりと、信心肝に命じ、感涙御袖を沾せり。

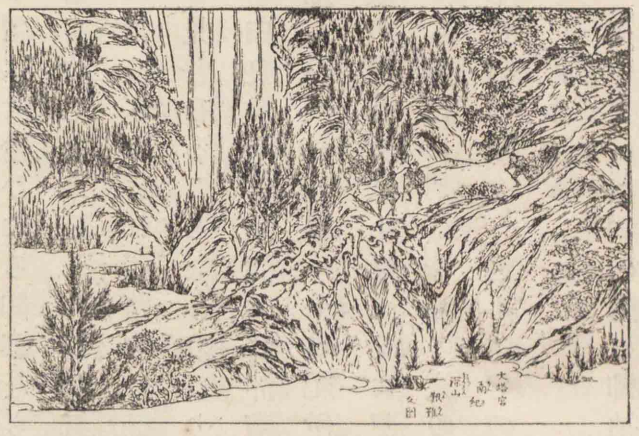
かくては、南都邊の御隱家も叶ひ難ければ、卽ち般若寺を御出あつて、熊野の方へぞ落ちさせ給ひける。　御供の衆には光林坊玄尊・赤松律師則祐・木寺相模・岡本三河坊・武藏坊・村上彥四郎・片岡八郎・矢田彥七・平賀三郎、彼是以上九人なり。　宮を始め奉つて御供の者までも、皆柿の衣に笈を掛け、頭巾眉半にせめ、その中に年長ぜるを先達に作り立て、田舍山伏の熊野參詣する體にぞ見せたりける。

この君固より龍樓・鳳闕の內に人とならせ給ひて、華軒・香車の外を出でさせ給はぬ御事なれば、御步行の長途は定めてかなはせ給はじと、御供の人々かねては心苦しく思ひけるに、案に相違して、いつ習はせ給ひたる御事ならねども、怪しげなる單皮・脚巾・草鞋をめして、少しも草臥れたる御氣色もなく、社々の奉幣、宿々の御勤、懈らせ給はざりければ、路次に行きあひける道者も、勤修を積める先達も、見咎むることなかりけり。

由良の湊を見渡せば、沖漕ぐ舟の楫緒たえ、浦の濱ゆふ幾重とも、知らぬ浪路に鳴く千鳥、紀伊路の遠山渺々と、藤代の松にかゝれる磯の浪、和歌吹上をよそに見て、月にみがける玉津島、ひかりも今はさらでだに、長汀・極浦の旅の路、心を碎くならひなるに、雨をふくめる孤村の樹、夕を送る遠寺の鐘、あはれを催す時しもあれ、切目の王子に着き給ふ。

その夜は、叢祠の露に御袖を片敷きて、夜もすがら祈り申させ給ひけるは、「傳へ承る兩所權現は、これ伊弉諾伊弉册の應作なり。わ

熊野落（太平記圖會）



が君その苗裔として、いま朝日、忽に浮雲のために隱されて冥闇たり。豈いたまざらんや。玄鑒むなしきに似たり。神若し神たらば、君何ぞ君たらざらん」と、五體を地に投げて、一心に誠を致してぞ祈り申させ給ひける。丹誠無二の御勤、感應などかあらざらんと、神慮も暗にはかられたり。終夜の禮拜に御窮屈ありければ、御肱を曲げて枕として、しばらく御まどろみありける御夢に、鬢結ひたる童子一人來つて、「熊野三山の間は、なほも人の心不和にして大義なり難し。これより十津川の方へ御渡り候ひて、時の至らんを御待ち候へかし。兩

護良親王

所權現より案內者に附け進らせられて候へば、御道指南仕るべく候」と申すと御覽ぜられて、御夢はすなはち覺めにけり。これ權現の御告なりけりと、たのもしくおぼしめされければ、未明に御よろこびの奉幣を捧げ、やがて十津川を尋ねてぞ分入らせ給ひける。

その道のほど三十餘里が間には、絕えて人里もなかりければ、或は高峰の雲に枕を敧て、苔の筵に袖を敷き、或は岩漏る水に渴を忍び、朽ちたる橋に肝を消す。山路もとより雨なくして、空翠常に衣を濕す。見上ぐれば萬仞の青壁、刀に削り、見おろせば千丈の碧潭、藍に染めり。數日の間かゝる嶮難を經させたまへば、御身も草臥

れ果てて、流るゝ汗水の如し。御足は缺け損じて、草鞋皆血に染まれり。御供の人々も、その身鐵石にあらざれば、皆々飢ゑ疲れて、はかばかしくも歩み得ざりけれども、御腰を推し、御手をひきて、路のほど十三日に、十津川へぞ着かせ給ひける。（太平記）

中學新國文 卷六 終

挿繪筆蹟 卷六

四頁 明治天皇宸筆

庭の木々にともし火をかけつらねたるをみて

かきりなくかけ連ねたるともし火のうつるも涼しにはのいけ水

三一頁 子規筆蹟

あきかせにさくらさくなり法華經寺　規

鳴雪筆蹟

元日や一系の天子不二の山　七十八　鳴雪

三二頁 碧梧桐筆蹟

秋日遊び足りて母ら子守ら　碧

三三頁 句佛筆蹟

片假名て子へ章を出す旅の秋　句佛

六四頁 吉田松陰とその筆蹟

三分出レ廬兮諸葛已矣夫、一身入レ洛兮、賈彪安在哉、心師三貫高二兮而無素立レ名。志仰三魯連一兮遂乏二釋レ難才一讀書無レ功兮、樸學三十年、滅賊失レ計兮猛氣廿一回、人譏二狂頑一兮鄉黨衆不レ容、身許二家國一兮死生吾久齊レ至誠不レ動兮自レ古未二之有一、人宜レ立レ志兮聖賢敢追陪。

己未五月、吾有二關左之厄一、時幕疑深重、復歸難レ期、余因以二永訣一告二諸友一謀レ使下浦無窮肖吾像、吾自贊レ之、願無窮知レ吾者、豈特寫二吾貌一而已哉、況吾之贊乎、諸友其深藏レ之、吾卽礫レ市、此輻乃有二生色一也。

二十一回猛士藤寅撰并書

吉田松陰筆蹟

七九頁 吉田松陰筆蹟

逢事ハ是ヤカギリノ旅ナルカ

是出二私情思一レ父婦人耳。何足レ言然思レ父決不レ然

世爾限リナキ恨ナルラン

但不レ能下如二子遠一言之詳上悉是所謂思レ父有レ情無レ辭者耳

何トナク聞ケバ涙ノ落ツルナリ

此志眞箇可レ愛豈得レ不レ泣哉

イヅレノ時カ恥ヲ雪ガン

思レ父有レ情無レ辭臨レ別能爲二此語一可レ知辭自レ情出非レ有二兩途一辭僅六十二字情豈千萬無量　然、眞哀二此辭一者吾與二子遠一兄弟而已故手錄寄レ之　松陰

八七頁 貞柳筆蹟　由緣齊貞柳

起ぬれは同しことこそいわまほしなむあみだぶつなむあみだぶつ

八八頁 赤良筆蹟

四方赤良

世中はさてもせはしき酒のかんちろりのはかまきたりぬいたり　丹丘畫

八九頁 橘洲筆蹟

鶯のひとこふしある歌よりや深谷の氷うちくたくらむ　唐衣橘洲

九〇頁 飯盛筆蹟

僊人も天狗も雲と見たかへてこすゑをふむなみよしのの花　飯盛

光筆蹟

冬あれし手のひら程の我庭をきめこまかにそ梅の咲ぬる　つふり光

九一頁 眞顏筆蹟

雲外螢　飛ふほたる雲の上まて逃過
はたなはたつめにつままれやせむ
眞顏

一二五頁 乃木大將辭世　臣希典上
うつし世を神さりましゝ大君のみあ
としたひて我はゆくなり

一二六頁 乃木夫人辭世　希典妻靜子上
出てましてかへります日のなしとき
くけふの御幸に逢ふそかなしき

一四九頁 蘆庵筆蹟

名所月　ぬはたまの黑髮やまは秋の
よの月みぬほとの名にそ有けれ　蘆
庵

一五三頁 高山彥九郎筆蹟

色かはる淺茅かはらになくむしの聲
よわりゆく秋そかなしき　正之

一五七頁 高山彥九郎筆蹟

皇統綿綿寶祚長久のしるしと嬉しく
て手の舞足の踏む事を知らず

昭和七年六月十日印刷
昭和七年六月十三日發行
昭和七年八月十二日訂正印刷
昭和七年八月十五日訂正發行

著作權所有
不許複製

中學新國文
全十册

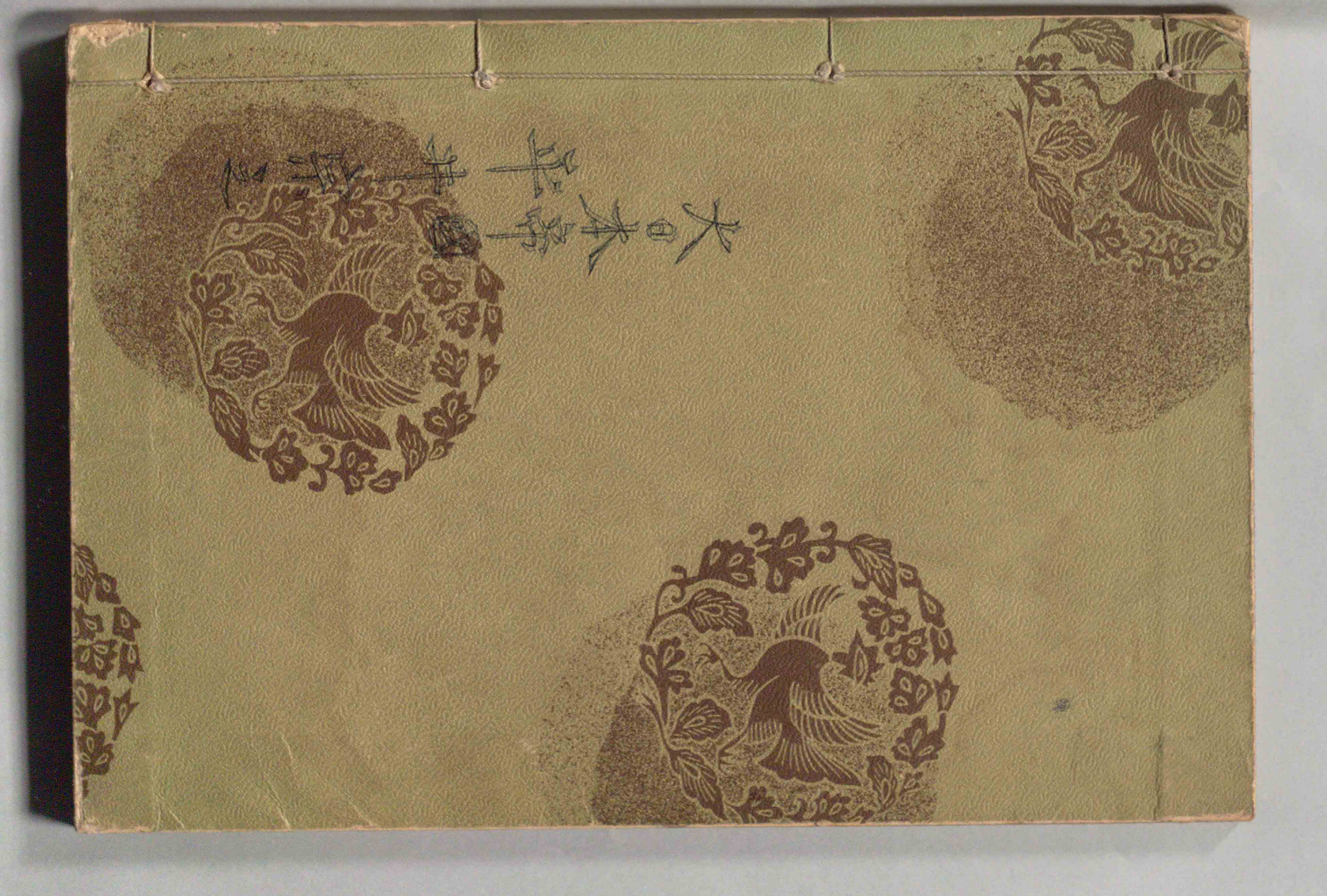
卷數	定價
一・二・三・四・五	各六拾五錢
六・七・八・九・十	各五拾五錢

編者　笹川種郎

發行者　東京市神田區仲猿樂町三十番地
株式會社帝國書院
代表者　增田啓策

印刷者　東京市京橋區銀座西二丁目三番地
高橋郁

發行所　東京市神田區仲猿樂町三十番地
株式會社帝國書院
振替口座東京六七〇一四番

關西販賣所　大阪市東區橫堀町四丁目三番地
三宅莊藏書店
振替口座大阪六九番

三協印刷株式會社印刷